FORSE

中条　剛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＦＯＲＳＥ

【Ｎコード】
Ｎ６８１７Ｗ

【作者名】
中条　剛

【あらすじ】
戦争は結局、いつの時代も起きる。
しかし、画期的な進化はあった。
それはヒュロルフターム。
５０ｍはあろうかという巨大な戦闘兵器。

――結局、戦争はいつの時代でも。
おきるものだ。

ＳＦ。というかロボットもの。
ちびちびと更新していきます。
Ｅ☆エブリスタとの重複連載です。
一ヶ月に数回、まとめての更新となります。

序章

結局、いつの時代も戦争は起きる。

かつては機関銃を用いてドンパチ、生身の人間どうしでしている時代があった。

かつては『戦争はやめませう』とかいうお偉いさんの鶴の一声で戦争をしなくなる時代があった。

でも、結局、戦争はなくならなかった。

そして『生身の人間で構成された兵隊』に存在意義を見いだせなくなった。

そんな中、生み出されたもの。

ヒュロルフターム。

資本主義のある国が制作した５０ｍ級の戦闘兵器は世界に『戦争の終わり』という希望の光となった。

しかし、結局、戦争はなくならなかった。

社会主義のとある国が作り上げた対ヒュロルフターム戦闘兵器。

その名も『ＦＯＲＳＥ』。

それによって、『人』対『人』の戦争は、『ヒュロルフターム』対『ＦＯＲＳＥ』となった。

では、

残された人間は？

1

「今日も平和だなあ……」

と薄い緑の迷彩服に身を包んだサリドという黒髪の少年は、背伸びをしながら、言った。

「……おーい。さぼるなよ。サリド」

隣でしゃがんでせっせと草をむしっている男は言った。

金髪で、無精髭を顎に生やしたその男はラッキーストライクのタバコでもくわえて、黒いサングラスをかけている方が、よっぽど似合う気がした。

だがしかしその男はあろうことか（というのはとても失礼だが）サリドと同い年の１６歳。未成年である。

少年の名は、グラムという。

「わかったよグラム。でもね。俺は朝の背筋伸ばしをしないと一日が始まらないんだよ」

「よく言って。そんなことを３０分もやってるくせにか？」

グラムは皮肉るようにサリドを笑った。

「所詮、戦争はヒュロルフタームとＦＯＲＳＥの戦いだ。人間の兵隊など、いらなくなった。」とか偉そうに言ってたのはどこの誰だ

ったか。

確かに、戦争はなくならなかった。

それは、だれにだって解ってる。

ヒュロルフタームという存在が。

世界の戦闘のシステムを変えた。

「でも、ヒュロルフタームは最初は平和的活用だったんだぜ？　核戦争があって人間が住めなくなった地上を作り直すための」

「そうなのか？」グラムは今まで抜いた草を綺麗にひとつにまとめながら、「でも、実際は違うじゃねえか。ヒュロルフタームが平和的活用の為に作られたってんなら、今俺らはこんなところにいないぜ？」

そうだな、と頷いてサリドは遠くを見る。

そこからは綺麗な青空と大きなコンクリートの建物が一、二個が見えるだけだった。

「にしてもさ」

「ん？　どうしたサルド」

「腹減った」

サリドの言葉を聞いたと同時に二人の腹の音がぐうと鳴る。

「……どうせレーションだしなあ。あのくそまずいレーション食うなら雪とか食ってたほうがマシだぜ」

グラムは立ち上がり、腰をぽんぽんと軽く叩きながら、言った。

「そうだよなー。せめて鹿とかいりゃな。塩焼きとかうめーんだろうけど」

「それがこのグラディアのだめなとこだよな。グラディアの、しかもこのへんは農牧なんてやっちゃいねえから鹿どころか生えてるのは野草だらけだよ」

ぶつくさ言いながら、グラムは自分の服にかけてあったホルダーから袋を取り出す。

袋を開け、そこからだしたのは白い小さな正方形の形をした何か。

それをグラムは口に入れる。

「うーん。やっぱ口の渇きをなくすには水がいいよなー。こんな唾液を出させるために、わざとカラカラのもの食わせるなんてな。そのうち唾液すらもでなくなるんじゃねーの？」

「そうとはいってもさー。やっぱ唾液にも限度があんじゃねーの？　だからそれはあくまでも一時的なやつで、長期間の喉の乾きを癒すのは無理とかどうとか、開発した学者が教鞭で言ってたぜ」

サリドは近くにあったスコップを地面に突き立て、言った。

「そうだな。ともかく戻ろうぜ。昼飯がなくなっちまう」

「あのくそまずいレーションでも食わなきゃ力になんねーしな」

そう言って二人は基地に戻った。

2

ふたりは十分後、その基地にたどり着いた。

基地と言っても、二人の務める基地は移動式の基地でトレーラーのような、そんな形をしている。

「……ほんとうに、平和だなあ」

ぽつり、サリドはつぶやいた。

「ほんと、お前それしか言ってねーな。まあ、たしかにここが戦場とは誰にもわからんけどな」

グラムはそう言って、二人分のレーションを取り出す。

「おっ、サンキュー」

そう言って、サリドはレーションを受け取る。

専用のスプーンを使ってアイスクリームのように、レーションをすくい、一口食べる。

「……うえっ、まずい。ほんとこれじつは消しゴムなんじゃないか、って思うよ」

「でも、食える消しゴムも開発されてるんだよな？　大災害とか空襲とかあったときに食料を確保できるように、とかで」

「臭い付き消しゴムが出た時点でありえそうな気もしたけどな。結局ゴムはゴムだからまずいものはまずいんだよ」

そう言いながら、グラムはさらに一口。

「いや、そうだけどさ。こんなまずいもんばっか食ってたら兵隊の覇気も下がるんじゃねーの？」

「作った人から見れば『戦いは所詮ヒュロルフタームとＦＯＲＳＥだけ』だから兵隊に関しては二の次なんじゃねーの？　あんま考えたくないけど」

と言ってサリドはレーションを口にほおり込んだ。

「さてと。また続きやっか」

「そうだな。ったくいつになったら終わるんだろうかなあ。はやく戦争らしいことやりたいぜ」

グラムはそんなことをつぶやきながら、近くにあったシャベルを持った。

「なにしてるの？」

二人はその声を聞いて、思わず心臓が止まるかと思った。

「……」

恐る恐る二人は振り向く。

そして、ほっと、息をつく。

「……姫がこんなところでなにをしてらっしゃるのです？」

「……バカにしてるでしょ？」

そこに居たのは軍服、といってもサリドたちとはことなる青の軍服だが、を着た少女がそこに居た。長い金髪が風にふわふわと揺れている。

「……暇だったからここにきたの」

「そっかー、たしかに暇だよな。戦争だってのに、敵からの攻撃０だしなー」

サリドは冷静を保ってしゃべっているようにも見えたが、

実際には至極緊張していた。

なぜか？

なぜなら、彼と話しているその少女こそ、

――『ヒュロルフターム』を操るパイロット『ノータ』の一人なのだから。

「……でも、この戦争ももう終わるよ」

「？」

「あれ？　さっき無線で鳴らしてなかったっけ？　ブリーフィングを行うからサッサとこい。ってね」

「え？！　まじか！！　じゃあおれら作戦を知らずに突入する羽目に……！！」

「もう終わっちゃってるから急いで聴きにいかないと。作戦決行は3時間後だよ？」

「やべえ！！　いそがなきゃ！！　ありがとう姫様！！」

かすかに敬礼をして、走る二人だった。

ふたりは上官の部屋に来ていた。上官はどうやら和風マニアのようで、『私は納豆が好きです』とか言うあまりよくわからない掛け軸とかがかかっていた。

「……あれほど、昨日ブリーフィングの時間については言ったと思ったんだけど」

その上官は軍服、というよりかは警察官のよく着る制服のような服に身を包み、左手にペンを握って、何か板のようなものに書いていた。

「タブレット、ですか？」

「ええ。よくわかったわね？」

そう言って、上官は長い銀髪をたくしあげる。

「少佐になるといろいろと大変でね？　このグラディアの戦争の他にリブガナ諸島のテロリストも制圧しないといけなくてね」

タブレットの脇にあるボタンを押すと、スクリーンになにかが映し出される。

それは、地図。そこに赤や青の点が動いている。

「私がこのタブレットにタッチすると赤のやつが反応する。それを引っ張ったりすれば殲滅したりできるってわけよ。ともかく私は忙しいの。あんたらがその私の忙しさをさらに忙しくしたのは分かっているよな？」

二人は答えない。

「分かっているよな？！」

「い、イエッサー！！」

ふたりは何かに怯えるように、敬礼する。

話がおわって。

「いやあ。こっぴどく叱られた」

「だな。というかあと3時間だったよな」

サリドとグラムは喋りながら、廊下を歩く。

「えーと、俺はあのまま草刈り続行かー。だいぶ辛いのですが」

「おー。頑張れ頑張れ、俺は冷房かかった部屋で『ヒュロルフターム』の整備だから」

「そうか。おまえそっち系目指してるんだもんな」

「ああ。夢はヒュロルフタームの設計士だ」

そう話しながら、サリドとグラムの二人は別れた。

3

「遅い！！」

整備場に着くと出迎えていたのは、ばあさんの罵声だった。

「ごめんよ。オレらだって任務があって」

「何が任務じゃ。お主は軍隊にも入ってないくせに」

そう。この少年。サリド＝マイクロツェフは、軍の人間ではない。正式にはヒュロルフタームの設計士を目指すために、ここに研修に来た、ようするに『研修生』なのだ。

「……まったく、今の若者は研修とか、時代が良くなったのう。わしがなりたての頃は試験一本だったしのう」

「そもそもばあさんがなるときはヒュロルフタームなんてなかったじゃないですか」

「ばあさんと呼ぶな。ライミュール＝ガンテ少尉と呼びな」

「はいはい。少尉。申し訳ありません」

煙管を吹かしている元気たっぷりなおばあさんは煙管が口の中から出てきそうな勢いで、言った。そして、それをサリドは軽やかにスルーする。

「さて、無駄話をしている暇もないの。お主はさっさと緊急装置の検査でもしてこい」

へーい、とやる気のないような声をだし、サリドは検査用の階段を上った。

そして、2階から、それを見る。

ヒュロルフターム。

人間の技術の結晶、とも言われるそれは、堂々とそこに立っていた。

そのヒュロルフタームは、簡単にいえば、人型――もっとも人らしいカタチをとったものだった。

頭には鶏冠のようなものがついており、胸の当たりは鋭角に出っ張っていて、まるで鎧をつけた西洋の城の騎士にも見えた。

「……これが」

「そうじゃよ。これが『ヒュロルフターム・ワン』。クーチェじゃよ」

「これが、ヒュロルフターム……」

「さてさて、急いで整備せんとノータ様が来ちゃうぞよ」

「わったた。そうだった。急がなきゃー！」

そう言ってサリドはコックピットに向かった。

「……といってもコックピットってごてごての機械ばかりと思ったらそうでもないんだなー」

「……パイロットであるノータはここに入ってかんぜんに密閉された後、酸素を含んだ特殊な液体をここに入れられるの。それで私たちはヒュロルフタームとリンクするのよ」

「へえー。そうなのかー……」

そこまで言って、ふとサリドは気づいた。

「はっ……!?　もしかして姫っ?!」

「……ちょっと試しに来たんだけど、まだ終わってなかったの?」

彼女はため息をついて、つまんなさそうに言った。

「あ。す、すまない!　いまから急いでやるから……!!」

そう言って、彼は緊急装置の整備に取り掛かった。

「あれ?　でも緊急装置っていっても、コックピットは液体で満たされているんだよな?　いったいどうやって脱出するんだ?」

「……それもわからないでヒュロルフタームの設計士目指すなんて。聞いて呆れるよね」

それを聞いてサリドはムッとするが、本当のことなので反論する気

はない。

「はいはい。すいませんでした。で？　天下のノータ様は一体何をするんです？」

「バカにしてるでしょ？」

一息。

「ま、いいわ。私これから試しに運転するからどいてて」

そう言って、彼女はコックピットに座る。

「さーてと、さっさと離れたほうがいいんじゃないかしら？　新米さん。その階段潰しちゃうかもよ？」

「げえええええ！！　まじかよ！！」

その言葉を聞いて、大急ぎでサリドは降りようとする。

だが、

「うぐっ」

「？」

マイク越しに、そんな声が聞こえた。

明らかに、苦しんでいる声。

「だ、大丈夫か！！」

叫んで、サリドはコックピットに向かう。

そこにはしまったシールドがあり、その半透明なシールドから

彼女の苦しそうな顔が見えた。

「なにをしとる。このバカモン！」

気付くとスタスタとあのおばあさんが階段を登って、ここまで来て

いた。

「……なんか、急に苦しくなったらしくて」

「そんなわけあるか。コックピットに液体は満たされているんじゃ。

他の理由があるに決まっておろう！！」

「そ、そうだよな……」

「にしてもだ。我々がそこを開けるのは難しい」

「へ？」

おばあさんから返ってきた予想外の返事にサリドは目を丸めた。

「……なにもわかっておらんのか？　そこにあるヒュロルフターム

は殆どが鉄板を何枚も重ねて作ってある。だがな、ただひとつだけ

違う」

一息。

「その、コックピットじゃよ。そこだけはオリハルコンとかいう金属で作ってある」

「ああ。……流した電流によって金属の分子構造を変化させて強度を増やした最強の金属、とやらですか」

サリドは教科書の受け売りのように話す。

サリドの言う通り、オリハルコン――というのはなにも力を加えない状態だと液体なのだが、そこに電流を通すと核兵器すらも耐えうる屈強なものへとなるものだ。

「まあ、要するにこれを力でどうこうするのは無理じゃ」

コックピットを叩いて、おばあさんは言った。

「じゃあ、どうすれば……！！」

「慌てるな。若いの。わしが今からある装置を持ってくる。コックピットに流れている電流と逆向きの電流を流して、コックピットを一時的に流体にする。それなら彼女は助けられるよ」

そう言って、おばあさんはおばあさんとは呼べぬほどの速さで走って消えた。

と、いうことはだ。

彼女はその機械が届くまで、ずっと苦しむ羽目になる。
それは、できれば目を背けていたい、でもはっきりとした真実。
（どうする……！！　このままじゃ、姫様が……！！）
「方法、ひとつだけ……　あるよ」
彼女は精一杯、その言葉を紡いだ。
「……それは？」
サリドが聞く前に、彼女は座席の下にあるボタンを押す。
直後、コックピットは大きく開き、そこから上に勢いよく座席が飛び出た。
しかし、コックピットが開くということは満たされていた液体が噴き出ることをも意味していて。
コックピットのそばにいたサリドはもろにそれを浴びてしまった。
疲れた表情で、笑いながら彼は一言。
「緊急装置、異常なーし……」

4

「それでなんかさっぱりしてるのか」

二時間後。ヒュロルフタームの清掃と液体の補填、スーツの着替えなどを済ませたサリドは作戦三十分前にしてようやく外に出た。

そこでグラムと出会った、というわけだ。

「ああ。まあいいリラックスにはなったかな」

「そこまで楽観的にいられると、逆にうらやましいよ」

グラムは苦笑いをしながら、サリドに言った。

と同時に。

作戦開始を報せるサイレンが、基地中に鳴り響いた。

「始まったようだな」

「なに冷静にしてんだよ！！　またあの和風マニアの暴力上官になんか言われる……」

そこまで言って、グラムの言葉は途絶えた。

不思議に思って、サリドは横を向くと、

そこにはあの和風マニアの暴力上官とやらが立っていた。

「……ちょ」

「誰が、暴力上官、だって？」

彼女は笑って言った。しかし目は笑っていず、戦争（たたかい）の時のような目であったが。

「……す、すいません……。リーフガットさん……」

謝ったのはグラムでなくサリド。しかも士官階級ではなく彼女の名前、リーフガット・エンパイアーを言って。

「……まあいいわ。さっさと体育館に向かって」

彼女は長い銀髪をたくしあげ、言った。

彼らはそれから逃げるように、走った。

体育館にはサリドやグラムのような軍服を着た大量の兵士がいた。

しかし、実質はこの人間たちの八割以上は戦わない。

戦争といえばヒュロルフターム。というほど、ヒュロルフタームが戦い方に浸透していた。

今まで、生身の兵士で機関銃などを用いてドンパチやっていた。

それをヒュロルフタームが変えた。

なんせヒュロルフタームは高さ５０ｍ。人間なんてせいぜい１ｍ後半。これだけで違いが全然わかることだろう。

そして、武器も変わった。

今までは『人間に持ちやすく、軽く、頑丈な』武器であったが、持つのは人間ではなく、ヒュロルフタームに変わったことにより、武器の幅が広がった。

例えば今までは重量などの制約上一チーム一個までしか所有できなかった移動式コイルガン、これでもステルス戦闘機一機分くらいの重量がある、だったがヒュロルフタームはこれを５０個所有して、装備している。それだけで人間とヒュロルフタームの違いが解るだろう。

「だから俺ら兵隊はなんのためにいるんだかなあ……」

グラムはあくびをしながら小さくつぶやいた。

解散して、サリドとグラムは基地の外に出た。

雪は、降ってはいないものの踏むと靴が沈んで隠れるほど積もっている。

「うーっ、寒い」

今はサリドとグラムはあの軍服の上に迷彩柄のジャンパーを着ている。言わずもがな、防寒対策だ。

かれらの右手には小さな機関銃がある。

しかしヒュロルフタームが来てしまえば役には立たない。シロナガスオオクジラにイワシが立ち向かうようなものだ。

故に、ヒュロルフターム“さえ”倒されると、それは負けを意味する。

なぜなら、

今の人間にヒュロルフタームを倒すすべがないから、だ。

5

ヒュロルフタームを倒されると、残された軍隊に待っているのは、死。

それを恐れるものは逃げるしかない。逃げて。逃げて。逃げて。逃げて、それでもヒュロルフタームが持つ射程５ｋｍの巨大レールガンには敵わないのだが。

だからこそ。

ヒュロルフタームを倒されると、あとは逃げるしかない。

冬の天気は変わりやすい。

先程まで快晴だったのに、今や１ｍ先も見えないほどのブリザードとなっていた。

しかし、そんなときにでもはっきりと見えた。

緊急装置を使って脱出したノータの姿が。

ヒュロルフタームを倒された兵隊を待っているのは、死。

これは、この戦いでも適用される。

ヒュロルフタームが一歩歩くごとに地面は揺れる。
そしてブリザードで前があまり見えないからこそ、恐怖が増大する。
今のところ、見えるのは、影。
ただただ、巨大な、それは、ゆっくりとヒュロルフタームを失った兵隊のもとへ近づく。
兵隊の、無線機を持っていた人間が、ボタンを押したり放したりしている。
たぶん、これが『白旗』なのだろう。何度も、何度も、その信号を送る。
そして。ヒュロルフタームは動きを止めた。
しかしそれは白旗に賛成、戦争の完結ではなく。
地面が細かく振動を始める。
危険を察知したときには、もう遅かった。
刹那、そのヒュロルフタームが装備していたコイルガンが兵隊に向かって撃ち放たれた。
「くそっ！！　このままじゃこっちもやられる！！」
グラムは双眼鏡でその姿をはっきりと見て、言った。

「でも、あの感じじゃあ、向こうは基地を知ってるぽいね」
「だから逃げるんだろ?！　急がねーと消し炭になるぞ！！」
グラムが叫んだそのとき。
ポン！　と赤い煙が空に放たれた。
「……発煙筒?」
「ノータがやったのかもな」
「?」
「グラム。兵隊にいるなら知っとけよ。ヒュロルフタームのノータはこういう時のための緊急用マニュアルがあるんだ」
「ノータはヒュロルフタームの技術を隅々まで知っているからか」
「そう」サリドは頷いて、「だからヒュロルフタームには自爆装置があるし、ノータに関してはどんな事をされようとも機密は話してはいけないんだ。ノータには戦争の捕縛兵条約が効かないからね」
「おいおい、それって……」
グラムが言葉を濁した。

「……そういうことだよ」サリドは肩にかけた機関銃のヒモを改めてかけなおし、言った。

「だからこれから姫様の救出作戦を行うんだけど君も来ないかい？」

「救出……ったってどうするんだ？　間違えたら俺らも捕まって捕虜だけじゃすまねーぞ」

「それは解ってるよ。だからこれを使うのさ」

サリドの手に握られていたのは信管のささった何個かの手榴弾。

「確かにこりゃあダイナマイトを何倍にも凝縮したやつだから普通の戦車とかならそれなりのダメージが与えられる。けどな、敵はヒュロルフタームだぜ？　主砲のひとつにも傷がつかないと思うけどな」

「いいんだよ。それで」

グラムの問いに、サリドは笑って答えた。

6

サリドたちは軍用のリュックにありったけの手榴弾とレーションをいくつか入れて、戦場にむかった。

「……死ぬ準備は大丈夫か？」

「ああ。死なないように頑張るさ」

「じゃあ、どこに行く？」

「とりあえず煙が出た場所。ヒュロルフタームもそっちに向かってるだろうし」

「そうだな」

サリドとグラムは同時に言った。

発煙筒が焚かれた場所。

それは森の奥深く。

ノータが入っていた緊急脱出装置が落ちてきたせいで、木はところどころで倒れていた。

そこに彼女――ノータはいた。

彼女は小さい頃から才能があった。

彼女は小さい頃から将来が約束されていた。

ヒュロルフタームのパイロット、ノータに選ばれる。それは人類から選ばれし『新たなる人間』と呼ばれるべき、こと。

大体は作った時に金銭を寄付したスポンサーの子供がなったりすることだ。

しかし彼女はその高い才能故にコネなどもなく、一般人からここまでやってきた。

それが、彼女にとってどれほどの自慢か。

それが、今の彼女自身を作った、と言ってもさほどおかしくはない。

要は、それほどのことなのだ。

「行かなきゃ……」

彼女は歩き出した。

それはこの戦争のためじゃない。

自分のために。

「『戦闘敗北の際のマニュアル』は果たした……。あとは逃げるだけよ……」

彼女は歩く。その度に右足が疼く。どうやら怪我をしてしまったようだ。

「くっ……」

彼女はその度に足を引きちぎられたような感覚に襲われる。

「耐えろよ……。私の足……」

彼女が息を荒げてつぶやいた、

そのときだった。

銃声が、森に響いた。

「まさか、もう敵軍が……！！」

しかし、銃声は一発では留まらなかった。

ターン！！　ターン！！　と、まるで逃げる獲物を追い詰めるような、そんな撃ち方だった。

「だれだかわからないけど。感謝するわ」

彼女はその銃声のした方に敬礼をし、また右足を引き摺りながら歩き出した。

時は少し遡る。

サリドとグラムは雪原をただひたすらと歩いていた。

「おい……！！　このままじゃ雪に体力を消耗されるだけだぞ！！
なんか方法はないのか？！」

「え？　あるよ」

サリドが足をあげ、そこを指差す。

よく見るとサリドの靴の裏に何かついている。

「……使い古しの畳……？」

「そ。あの和風マニアの上官は陽射しで畳が焼けるのがいやだから月に一回ペースで畳替えするんだよね。それで使われなくなった畳を靴につけて接地面を広げて、足が雪に沈むのを防いだ、ってわけ」

サリドは、そう言ってまた歩き出す。

「てかそういうのあるなら先に言えよ……」

「うん？　君の鞄に入ってる筈だよ。それに一回言ったはずだし」

「……そうだったか？」

「物覚え悪いなあ。グラムは。姫様を助けに行く、って言ったときにそう言ったじゃないか」

「ま、いいや。とりあえず俺も装着するから待ってろ」

言って、グラムはリュックを開けた。

「よし。これでバッチリだ」

グラムはまだ堅い新しい靴を履いているかのように、爪先を地面で叩く。

「……やっぱ、寒い」

「時間的には正午……一番陽射しが当たってる時間なんだけどね？　やっぱ冬だからかなあ。陽射しも心もとない気がするね」

サリドは、涼しげな顔で、実際は涼しさを通り越して寒いのだが、言った。

「これでほんとに7月かよ……。環境破壊にも限度があるだろ」

「たしか、グラディアは環境開発技術で有名なんだっけ？　だからこのあたりは実験地帯で気候が変化しやすいらしいけど」

「変化しすぎじゃ、ボケ！！　どうしてサリドはそこまで冷静でいられんだよ？！」

サリドは手に持っていた携帯端末をグラムに見せて、

「事前資料とかちゃんと見ときなよ。そういうのが勝利の糸口になったりするんだし」

「……そうだな」

グラムはその直後、サリドにぶつかった。

「どうした？」

「あれ、見てみろよ」

サリドに従い、グラムはその方を見た。

そこにいたのは、兵士。グラムたちと同じ迷彩服に身を包み、手にはアサルトライフル。

「……何人いる？」

「解らない。隠れている、という可能性も考慮しなきゃいけないし……。もしそれがないとするなら3人かな」

「……姫様は捕まったのか？」

サリドは悴んだ手を自らの息で暖めながら、「さあ、どうだろ？でもあの感じからするに奴らも緊急装置の落下ポイントはわかってたみたいだね」

「向こうはアサルトライフル三挺。に対してこっちは機関銃、しかも旧型の１７１５年製が二挺に手榴弾とプラスチック爆弾が幾つか、か……」

「どうする？」グラムの問いにサリドは笑いながら、「行くっきゃないでしょ。俺らの目的は姫様を救うことだ」

刹那、彼らは敵陣に飛び込んだ。

7

そのころ、和風マニアの暴力上官ことリーフガット・エンパイアーはブリザードの中を、生き残った兵士たちとともに歩いていた。

「弱まるどころかますます酷くなるばかりね……」

リーフガットは、つぶやくように言った。

「あの問題児たちも行方を眩ますし……、問題は山積みね……」

そんなとき、彼女の無線機に通信が入った。

相手はその“問題児”。サリド＝マイクロツェフからだった。

「サリド＝マイクロツェフ。そこで何をしているの？　というか今はどこ？」

あくまでも怒りは消し去り、冷静に質問するリーフガット。

それに対してサリドは、

「俺らは今クラーク雪原の森に来てます！　そこであった敵兵と銃撃戦中です！」

タタタタタン！！　と会話の合間や会話中に聞こえてくる。おそらくそれが敵の銃声と味方――即ちサリドたちの銃声なのだろう。

「サリド。作戦は失敗したのだ。ヒュロルフタームも壊され、グラディア軍に立ち向かえるものはない。急いで戻ってこい。本国に戻れば『クーチェ』の予備がある。それを用いてまた進撃すればいい」

「でもその間に敵も回復しますよね？　そしてまたやられた堂々巡りじゃないんですか？」

上官の事実上の“退却命令”にサリドは返した。

「……堂々巡り。たしかにそうかもしれない」

一息。

「ならばお前らにヒュロルフタームが倒せる術があるとでも？　お前らもヒュロルフタームの凄さは解っているだろう？」

「解っています」サリドははっきりとした口調で、「解っています。解っているからこそ戦いに行くんです。それに……」

「それに？」

リーフガットの言葉にサリドははっきりと答えた。

「勝機なら、あります」

8

サリドはリーフガットとの通信を切り、指でオッケーのサインを作る。

それを見てグラムは、「おいおいおいおい。まじであの暴力上官、そんなの許可したのか?!」

「うん。許可、というか反論出来ないようにしといた」

「なんなんだお前、詐欺師の方が向いてるんじゃねえか?」

「ま、そうかもね」

……サリドたちの周りには何もなかった。

最初から、何もなかった。

「つーか、さすがの暴力上官も戦闘中に通信することはない、って思うんじゃねーのか?」

「そこは一種の賭け、ってやつだよ」

サリドとグラムは話ながら森の中を進む。

「にしてもどうすっかなー。ヒュロルフタームの攻略法」

「なっ？！　まだ決めてなかったのか！！」

「いや、決まってるんだけど、それじゃあなんか決定打に欠ける気がするんだよねえ……」

「どうするんだよ？　俺に話してみろ」

グラムが言うと、サリドはグラムの耳元で囁いた。

「……ってやつなんだけど、どうかな」

「悪くはないけどそこまで誘き寄せるのが難しいな。失敗したらとんでもねーことになるけど」

「まあ、失敗したら仲良くあの世行きさ。とりあえず敵のヒュロルフタームを探そう」

「お前とあの世行きとか死んでもやだけどな」

サリドとグラムはそう話ながらさらに森の奥へ進んだ。

ズシィィン、と地面を揺らすような音がサリドの耳に届いたのは、そのときだった。

「どうやらお出ましのようだな」

「ああ。じゃあ、グラム。お前が囮な」

「は？！　そこはサリド、お前じゃないのかよ！！」

「だって、この作戦の発案者は俺だ。俺にできる時間で考えてある。ということはお前が囮になるほかないだろ？」

「……」グラムは舌打ちして、「解ったよ。じゃあ俺は相手のヒュロルフタームをあの場所に連れていきゃあいいんだな？」

「ああ。よろしく頼むよ」

そう言って、二人は別れた。

――成功したら前代未聞となるであろう、『人間がヒュロルフタームを倒す』作戦のため。

9

サリドはグラムと別れ、雪山を登っていた。

雪道を歩く、というのはとても体力を消費する。

「……疲れる……」たかが研修でやってきた学生には容易ではないことだ。

「でも、やらなきゃやられる……！！」

サリドは歯を食いしばって進む。

「グラムはうまくやってんのかなあ。あっちで失敗したとか言ったらキレるぞ」

そのころ、グラムはどこかで手にいれたオフロードカーを運転していた。

彼は１６歳――さしあたって運転免許をとることが出来ない年齢のわけだが。

近年、軍隊全体の若年化が進み、軍用免許に限っては１６歳から取得できることが許されている。

「といってもこんな最新型運転したことねぇ……！！」

ガクン、と車体が上下に揺れる。おおよそ崖か砂利道に突入したの

だろう。
後ろから追ってくるのは、最新鋭の人型戦闘兵器・ヒュロルフターム。
――では、なかった。
「なんだよ、あれ！！　初耳だぞ！！　社会主義の国にも戦闘兵器がいるだなんて！！」
「グラム・リオールからサリド・マイクロツェフへ！」
グラムは即座に無線機をとり、周波数を合わせ、叫んだ。
『なんだ。グラムか？　今逃げ回ってる最中じゃ……』
「いいからよく聞け！！　俺らが戦っていたのはヒュロルフタームじゃない！！　それにうまく似せた人形（ゴーレム）だ！」
『……なんだと？！』
さすがのサリドもその事実には驚いたようだ。
「嘘じゃねぇ！！　あれはダミーだ！！　よく考えれば社会主義国を名乗るグラディアに資本主義国の象徴であるヒュロルフタームがあるわけないんだ！」
しばらく、サリドからの返事はなかった。考えているのか、驚いて何も話せないのか。

それに関係なくグラムは続ける。

「いいか。ひとまずあの戦闘兵器にヒュロルフタームほどの装甲があるとは思えねぇ！！　ここにある武器でなんとかやってみながら、あの場所に誘き寄せる！！　さっきのは最悪な意味、ということでいいな！」

『わかった。死ぬなよ。グラム』

「お前もな。サリド」

そう言って二人は通信を切った。

サリドは通信が切れてからまた雪原を歩き出した。

といっても今は切り立った崖を登っている。

「なんでったって……、登山道がないんだよ……」

サリドはぽつり呟く。よく考えれば当たり前のことだがこの周辺は環境開発技術の実験地帯である。

よって逐次変化する環境により植物は破壊され、残るのは荒地と一部に眠る悪環境に強い植物のみ。

「まあ、当たり前か……」

サリドはそう言いながら崖を登りきった。

そこは、山の、というよりは小高い丘の、頂上。ここから見える風景はすべてが白い。

彼は目でグラムを追う。

やはり、簡単に見つかった。

「あれだな……。最新型のオフロードじゃん。よくあんなの戦場に落ちてたな」

サリドは双眼鏡を取り出し、そのオフロードが走る方角を見た。

「あれが……『敵のヒュロルフターム』か。……グラムの言う通りあれは違う……」

サリドは踵を返し、「さて、俺もあれが定位置にくる前に準備しなきゃな」

笑って、言った。

通信が切れてから、グラム。

「なんだよなんだよ！　この車軍用じゃないのかよ！！」

グラムは運転していて横目で車内の装備を見て、愕然とした。

軍用のオフロードカーで迷彩柄であったのに中にあったのはカメラ、マイク、フィルム……

「……これ、報道機関の車か。ややこしい装備しやがって」

グラムは唾を吐くように言った。

しかし、そんなことはもう関係ない。今更この車を捨てて逃げるだなんて無意味かつ無謀だ。

「とりあえずあるのは護身用のライフルと、手榴弾……、しかも『レイリー・コーポレーション』製じゃないのかよ……。どんだけ弱小なんだ、このパパラッチは」

レイリー・コーポレーション。

世界一の軍事企業で『資本主義国』の軍はすべてその会社の武器を用いている。

「……まさか、社会主義国のパパラッチか？　資本主義国のパパラッチはみんなレイリー御用達の筈だしな。ああ、めんどくさい」

グラムはおもちゃに飽きた子供のような表情で、言った。

「とりあえず……、反抗しときますかね」

そう言ってグラムは手榴弾の信管を抜き、後ろから追ってくるゴーレムに投げつけた。

ドゴォォォォン！！　と耳をハンマーで叩かれたような衝撃がグラムを襲う。

「……やっぱゼロ距離からの手榴弾は自殺行為だな！」

爆発の衝撃でグラムの両耳が耳鳴りを起こしている。

「……うぐっ……！！」

不意に、車のバランスが取れなくなる。

人間は耳にある三半規管という半円状の三つの管でからだの平衡をとっている。

それが衝撃を負い、一時的に使えなくなったとしたら？

「うおおおおお！！」

グラムは叫びながらがむしゃらにハンドルを握り、左やら右やらに回す。

……バランスを取り戻す作戦は見事に失敗し、グラムの運転した車は樹に激突した。

「……畜生……。まさかこんなところで……」

グラムは激突し、見るも無惨な姿と化した『報道機関』の車から抜けでた。

「……こうなりゃ、足で逃げるしかねぇな」

言って、グラムは自身の装備していたアサルトライフルを構える。

「避けろ！！　グラム！！　飲み込まれるぞ！！」

そのとき、サリドの声が雪原に響いた。

その声を聞いてグラムは咄嗟に走る。

ゴーレムもグラムを追おうとしたが――

刹那、ゴーレムを覆うように、雪崩がやってきた。

ゴゴゴゴゴ！！　とまるで戦車のキャタピラーの音のような轟音で、雪が、その雪によって倒れた樹が、ゴーレムとグラムがいる谷に流れ込む。

「うおおおおお！！」

叫びながら、グラムは雪崩に飲み込まれないように走る。

ゴーレムはピギャギギゴゴガガ！！　とまるで何かの鳴き声を最初は発していたのだが、暫くして、雪に埋もれたのか、その声は聞こえなくなった。

雪崩が収まり。

「助かった……。あれがなくちゃ今頃あのデカブツの餌食だったぜ」

グラムは腰に提げていたウエストポーチから袋を取り出し、そこから“唾液で喉を潤すための乾いたもの”を取り出し、一粒口に入れた。

「まあ、成功した方かな？　にしてもほんとにヒュロルフタームじゃないなんてね」

サリドは雪崩の残骸からなにかを取り出す。

「なにそれ？」

「ゴーレムとやら、見た感じ『生物』っぽいんだよね。とりあえず採集しとく」

「大丈夫かよ。もしまた起きたりしたら」

「大丈夫、大丈夫。……さて、これで一つ目の目標は達成だね」

サリドの言葉にグラムはうなずく。

そして、サリドは言った。

「姫様を、救いに行くよ。何も武器を持たない弱腰ナイトの二人でね」

10

彼女は閉じ込められていた。

強度は世界最強とまでいわれる青い服は、ところどころが破れていて、そのところどころから血が滲み出ていた。

彼女は、資本主義国の列強『資本四国』の中にあるレイザリー王国の人間だ。

――その国で、最強と呼ばれた存在。

――国を、まもる存在。

彼女は、ヒュロルフタームのパイロット、ノータだった。

そのころサリドとグラム。

「畜生。ここで姫様の生体反応が切れてる。ここで捕まっちまったのか？」

「そうかも。だって見てみろよ」

サリドが指差した方向には、なにもなかった。

「……なにもねーぞ？」

「ちゃんと見なよ。雪にあんなに変な感じに埋もれてるとかおかし

いだろーよ」

「……だな」

グラムは納得した。

戦争はヒュロルフタームどうしの戦いである。

故に狙われるのはヒュロルフタームと、その操縦士、そしてそれを整備する機材や替えのパーツなど、だ。

だから、機材は隠す必要がある。

「だからってあんなあからさまに隠すとはな……。よくバレなかったな……」

サリドは笑いながら、「今まで機材に直接攻撃がこないからじゃない？　この国がヒュロルフターム一機しか持ってなくてよかったよ」

「しかも紛い物だけどな」

サリドの言葉にグラムは続けた。

サリドとグラムはその不自然に盛り上がった雪を払った。

すると、

「やっぱりな。俺の言った通りだ」

その下には銀色の金属が見えた。

「しかしだな、サリド」

「なんだ？　グラム」

「今敵の本拠地を発見した。これはいいことだが」グラムは顔をしかめ、「実際入口はどこにある？　まさかこのだだっ広い空間のどこかに埋もれてるとするなら探すには骨が折れるぜ」

「簡単じゃん。そんなの」サリドの答えは意外にもあっさりしたものだった。

「別にだだっ広い雪の中を虱潰しに探さなくていいんだよ。どう考えたって入口は雪に一番近いところかつなにか物体、しかも自然の、があるところだよ」

「……なんでそうだって言えるんだよ」

「グラム。考えてみろよ。今や電気通信がすべて手玉にとれる戦場で無線なんか使ってみろ？　虚偽の事実を流されて自軍が混乱させられちまう」

「つまり……、どういうことだよ？」

「お前はほんとに閃きが鈍いな。それでも兵隊か？」

「……所詮俺は『貴族』で父親が政治家の七光りですよーだ」

「ヴァリヤー上院議員だっけか。ヒュロルフタームプロジェクトを推進する一人だったな」

「ああ、そうだよ。『クリーンな戦争』を心がけていたらしいが、最近は結果主義で結果を得られない兵は即辞めさせられる。嫌ってるやつも相当いるんだろうな」

「ヒュロルフタームが中心となった戦争でどう活躍すりゃいいんだろうな」サリドは手元にあるアサルトライフルを眺めながら、「本題に戻すか。つまりさっきの理由から無線は無理だ。即ち有線にする必要がある」

「しかしそれじゃあ断線とかさせられて閉じ込められるんじゃ？それにチャンネルを逐次変えるサイン無線波なら大丈夫だと思うんだが」

「サイン無線波はコストがかかるし資本主義国内にしか流通してない技術だからそれは有り得ないよ」

サリドはアサルトライフルを構え、言った。

「つまり、このあたりの雑木林にスイッチがあって、そこから入れる。……『建物は下から入る』という常識を覆してはいるよね」

「おまえそんなこと言ったら地下室は常識の範囲外なのかよ？」

グラムはサリドの言葉に苦言を呈する。

「……そんなことより、さっさと行こう。『地下帝国への入口』を探しに」

間違えた恥ずかしさを無くすためか、一瞬物事について深く考え、
そして言った。

11

『地下帝国への入口』というのは意外にも簡単に発見された。

雑木林の中に一本だけ、違う樹が生えていたからだ。

「……バレバレにもほどがある。罠か、それともただのバカか」

「罠でもバカでも入るしかないよ」

サリドはそう言い、スイッチを押す。

刹那。

ゴゴゴゴ！！　と地面が低く唸りを上げる。

そしてそこからなにかが競り上がってくる。

その形は、いわば円柱。

「おいおい、マジかよ……」

グラムが驚きながらも、呟く。

「ほんとうだよ」サリドは競り上がる円柱を見上げながら、「きっとこれが入口だ」

そのころ、どこかの牢屋。

ところどころが切り裂かれボロボロになった軍服を着た少女は、声も出さず泣いていた。

心が、折れかけていた。

プライドが砕かれかけていた。

彼女の、『ヒュロルフターム』のパイロット、ノータとしての。

平民からここまで登り詰めた、という彼女のプライドや覇気はもはや消えかけていた。

風前の灯火。

彼女の状態は、そんな感じだった。

「あれ？　ここ、どこだろう？」

彼女の聞いた声は一瞬、幻のようにも感じられた。

しかし、それはすぐに覆された。

「サリド、てめえ、迷いやがったな！　畜生……。ここはいったい

どこだ？」

「見た目から牢屋とか、そんな感じかな？　少なくとも有益なものはなさそうだね。はやく姫様を探しに行こうよ。グラム」

名前の知らない、二人組。

この声は聞いたことがある。彼女は確信した。

作戦前に出会った兵士。

なぜ彼らはここにきたのか？

そのとき、サリドと呼ばれた少年から言われた目的。

『姫様を探しに行こう』

彼女自身が軍内で姫、と呼ばれているのは彼女自身もわかっていた。ノータに特別な意味を持たせる、兵士に兵士とノータの違いを見せる、ための“あだ名という名の敬称”。

他のノータは『蟻蜂（ぎほう）の騎士』とか『火薬娘』とか『闇の袂』とか、なんだかかっこいい名前をつけられているのに。

国の定めか、単純な『姫』だけ。

姫、と言っても国を指揮したり、王様の隣に座ったり、豪勢な城にいるわけでもない。

彼女は指揮される立場で、座るべき場所はヒュロルフタームのコックピットで、彼女にとっての城がヒュロルフターム・クーチェなのだ。

「おい！　もしかして……」

兵士の声が、姫様の前で響いた。

「えっ」姫様は声をだした。

つもりだったが聞こえなかったのか、兵士は耳をたてる。

「グラム、どうしたんだ？」

「サリド、姫様が見つかった」

「えっ」

どうやら先ほどの兵士たちだったのか、と姫様は安堵する。

「立てるか？」

「グラム、それより足枷手枷を外そう」

「おっと、そうだな。針金とかあるか？」

「あったら簡単なんだけどね。生憎そんなのはないよ」

「くっ、こうなったら……。姫様、動くなよ」

グラムはホルダーから小型の銃を取り出し、それを彼女の両腕と両足につけられている枷に向かって撃った。

サイレンサーをつけていたのか、音がその牢屋に響くことはなかった。

総ての枷が破壊され、自由の身となった彼女。まずは手足をちゃんと動くか確認するように動かした。

気づいたら彼女は泣いていた。

なぜだかは解らない。

ただ、無意識に、彼女は涙を流していた。

「お、おい？　大丈夫……か？」

グラム、と呼ばれたサングラスをかけてラッキーストライクを吸っているのが似合いそうな青年は尋ねた。

「どうして、ここまで来てくれたの？」

「？」

「何を言ってるんだ？」

今度はサリドと呼ばれた年相応に見えない幼い顔の青年が答える。

彼はアサルトライフルのＡＫ４７を肩にかけ、「困ってる人間を救っちゃ悪いのか？」

「……いや、別に」

姫様はサリドの予想外の発言に何も返すことができなかった。

「じゃあ、脱出するぞ……、って姫様怪我してるじゃないか。こんなところだと破傷風にかかっちまう。とりあえずここを脱出しよう」

グラムは姫様の怪我をした右足を見て、言った。

12

ここは、救護室。

今は姫様の怪我を治療しに危険を省みずここまでやってきた。

「これで大丈夫かな」

サリドは包帯の巻かれた姫様の右足を見て、言った。

「……ありがとう」

「いいってことよ。とりあえずさっさと脱出しようぜ。援軍が襲ってくるかもしれねえ」

「グラムの言う通りだ。でもヒュロルフタームはさっきも言ったけどひとつしかない。それも紛い物のね」

「……あれが偽物なの？　わたしが戦った感じからしてあれは『第2世代』のヒュロルフターム並みに強かったけど？」

姫様は続ける。

「それにあれが偽物とは有り得ない。ヒュロルフタームはヒュロルフタームでしか倒せない。その原則をやぶることになる。それを『社会主義国』が出来るとは思わないけど？」

「それはそうなんだよな……」

サリドは姫様の言葉に答える。

「そこが問題なんだよな」

サリドは続ける。

「まあ、ひとまずこれも手にいれたし。十分頑張ったんじゃないかね」

そう言ってサリドは透明のカプセルを取り出す。

「ああ。さっきの戦闘兵器の肉片ね」

グラムは素っ気なく答える。

「肉片？」

しかし、それに姫様が食いついた。

「ちょっと待って。なぜそれを先に言わないの？　それじゃあヒュロルフタームの類いなわけないじゃない」

「黙ってたわけじゃない」

「……とりあえず、本国に帰ろう。もう俺は疲れたよ」

グラムのその言葉を聴いて、サリドたちはこっそりと救護室から外に出た。

13

ここは資本主義国の列強、『資本四国』のうちのひとつ、レイザリー王国。

この国は“王”国であるものの、実質的な支配は４人の実力者によって形成される『四天王』と呼ばれる組織が行っていた。

飾りだけの王、とはなんとも心細いものだろうか。

家具や柱や壁の至るところに漆や金や銀が貼ってあった。

しかし唯一天井の着いたベッドに犬のぬいぐるみを抱き抱えている少女が、何故かそれに浮いて見えた。

彼女はこの部屋の持ち主なのに。

彼女はこの国を支配していたのに。

彼女はこの国の“王”と呼ばれる存在であった。

時折、苦しそうな表情を見せ、頻りに下腹部からそのなだらかな胸のあたりまでをさする。

「……う……あっ……」

なにか吐き出しそうな感情。それは彼女はおろか誰にも止めることはできない。

「王様」

扉の向こうから、深い低い声が聞こえたのはそのときだった。

王と呼ばれた少女はその声を聞いてすぐに表情を明るくし、けっしてそれが悟られないようにした。

「入れ」

少女が出した声は先ほどのそれとは違い、深く低いものだった。

「失礼いたします」

そこに入ってきたのは茶がかった肌に白い顎髭を蓄えた紅い眼の人間だった。

「……ヴァリヤー・リオールか。どうした？」

「……今回の戦争の功労を労うための祭に出ていただきたいのですよ」

女王は軽く咳き込みながら、「わかった。いつごろに行う？」

ヴァリヤーは手帳を見ながら、「ええと、今日の１７時に軍飛行機が空港に降り立って凱旋したあとなので……２０時からですかね」

「それはまた急だな」

「なにしろその彼らはすぐに別の戦争に行かねばなりませんから」
「彼らも忙しいな。早くこの戦争が終ればよいのだが……」
「ええ。その通りでございます」
ヴァリヤーは恭しく笑いながら答えた。
凱旋パレードを終え、宴の会場にやってきたサリドとグラム。
「あんたたちは知らないだろうけど、宴の最初に表彰があるからね。勲章ものだから盛大だよ」
上司であるリーフガットはタブレットを弄りながら言った。
「へえ、それはすごいですね」
「なに余所者風を吹かせている。表彰されるのはサリドとグラム……あんたらだよ？」
会話の後。
「すげぇなあ。俺ら」
「え？　なんで？」
「だって考えてみろよ。この戦争で勲章だぜ？　しかも紛い物とは

いえ『ヒュロルフタームを人間だけで倒した』ってな」

「まあ少なくとも後の歴史には語られそうだね」

サリドとグラムは宴の会場に作られた小さなステージの裏に着いていた。

「そういえばさ。王様ってどんな人間なんだろうな？　見たことないや」

「この国の王を継ぐのは代々女性がなるものだから女、ということは言える」

「なんだいその知ってる素振りは」

「俺も一応『貴族』の端くれ。小さい頃から『王族と仲良くしておくように』と言われてな。王族のことは結構学んでるつもりだぜ。たしかその名前は……」

そのとき、グラムの言葉を遮るように角笛の音が響く。

「おっ、始まるみたいだな。急いでいくぞ」

「だな」

二人は小さく頷き、舞台に上がった。

舞台は四角く作られていて、そこに四つほど席があり、そこに軍服を着た人間がそれぞれ座っていた。肩につけられた星の数が、それ

を物語っていた。

「グラム……。おれ、こういうのは緊張するんだよね……」

「これで緊張しないやつはいねぇよ。当たり前のことだぜ……」

両者が聞こえるか聞こえないか位の声で、二人は話をする。

「では、これから勲章授与を行いたいと思います」

優しい、白髭を蓄えた軍服を着た老人は、その口から嗄れた声を出した。

「グラム・リオールにサリド・マイクロッェフ。両氏はヒュロルフタームをなんと素手で倒したと言うのですから、驚きです」

次の発言に、

ヒュロルフタームのことを学ぶため、学校に戻ろうとした学生と、

軍をやめ、平穏無事な生活を送ろうとした貴族の、

『幻想』は打ち砕かれた。

「是非とも、その力を、次の戦場で使っていただきたい！　両氏の末永い健康を願い、勲章を授けたいと思います」

その発言のあと、サリドとグラムはなにをしたのか、覚えてはいなかった。

あの言葉はきっと空耳だ。信じられない。と、思っていたのだが。

宴が終わり、リーフガットの一言。

「じゃあ、宴はここまで！　明朝、プログライトとの戦争に臨むのでそのつもりで！」

リーフガットの発言に兵士たちは声ともつかない声を出し、叫ぶ。

「ちょっ、ちょっと待ってくださいよ」

「なんだ？　サリド・マイクロツェフ」

「……俺ら、もう帰りたいんですよ」

「あら？　『素手でヒュロルフタームを破壊した』あんたらを軍が簡単に手離すとでも思った？」

サリドは返せない。

「そういうことよ。じゃあ明朝は8時出発だから、そこんとこ自分で調整しろよ」

「……！！　もう2時廻ってるじゃないすか！！　いったい何時まで宴会をする気で？」

「そうか。あんたらははじめて参加するのよね。じゃあ言っとくけ

ど“夜通し”よ。日の出まで続くわ」

んなあほなーっ！　とサリドは思っていたが、

「まああんたらははじめてだし大事な人材だから早めに戻ってゆっくり寝ろ。一応言っておくが逃亡は銃殺刑だからな？」

――どうやらこの二人の軍務は、まだまだ続きそうである。

13（後書き）

ひとまず第一章完結です！！

1

プログライト帝国。

世界一広大な国として知られ、その広さは『資本四国』とほぼ同じとまで言われる。

また資本主義国と社会主義国、どちらにも属さない、所謂『独立覇権』と呼ばれるグループのひとつである。

かつてはその豊富な鉱物資源から栄華を誇っていたが、今は影が落ちつつある。

先述のとおり、この国は資本主義国にも社会主義国にも属さない国である。

この世界は自らの信念、『資本主義』と『社会主義』を貫かんとする人間によって構成されている。

そして、その信念を世界に拡げようと戦争を起こす。

かつてはこの世界にも資本主義と社会主義が共存した時代があったという。

戦争も別の目的で起きていたという。

しかし、そんなことは今の世界を見る限りで有り得ない事実。しかしそれは真実。

そんな人間たちが、どちらにも属していない国ですること。

それは、なんだろうか？

「ビッグ・フロート？」

「ええ。プログライト帝国軍の砦と言われている場所よ。半径１．５ｋｍの円に、高さ１ｋｍの塔が立っている。そこを攻めて陥落させれば私たちの勝ち」

「でも海上に浮いてるんですよね？　海水の分子を崩して沈めたり、戦闘機で爆撃したり、水上戦に特化したヒュロルフタームを使ったりすればいいじゃないですか」

机を挟んで、三人。

サリドとグラムは不機嫌な表情だった。

しかしサリドは疑問に思ったので、今のことを机のむこうにいる上司――リーフガット・エンパイアーに尋ねた。

「そんなので壊せるなら１５年も戦争を続けていないわよ」

「そりゃそうですよね」

「なにしろ、」

リーフガットの答えは予想を翻すものだった。

「分析できない謎の力の結界がそれを覆っているのだから」

「『分析できない謎の力』？」

「……彼らはそれを『奇跡の業』とでも言ってるらしいがね」

「しかしレイザリーは資本主義国の中ではトップクラスを誇る技術国。それくらいのことも簡単に」

「解らないから戦争が泥沼化しているんだ。さっさとわかれ」

サリドの言葉を、少しイライラしているのかリーフガットはぶつ切りにして言った。

「……で、俺らは実際にどうすりゃいいんです？　まさかその『ビッグ・フロート』とやらにある結界を解除しろだなんて……」

「まさにグラム。あんたの言った通りよ」

サリドとグラムの目が同時に点になった。

「あんたらは『ビッグ・フロート』の結界を内部から破壊する、こと。それだけでいいわ」

2

ブリーフィング後。

「さらっと言ったけど15年間出来なかったことを俺らにやらせるってどういうことなんだよ」

サリドとグラムはキャンプの廊下を話ながら歩いていた。

「でもグラム。考えてみりゃ成功したら英雄だぜ？　プログライトは力こそないもののその『結界』のせいでいわば最強と呼ばれてる。結界さえぶち壊せばこっちのもんだよ」

「サリド、お前はどんだけ楽観主義者なんだよ……」

グラムは項垂れながら、サリドはグラムがなぜ項垂れているのかわからないまま、廊下を歩く。

「おっ、姫様」

サリドの声に気づいた姫様はさりげなく笑顔を振り撒く。

「……たしか、サリドに……誰だっけ？」

「グラムです！　グラム・リオール！」

グラムは今まで項垂れていたのが嘘みたいに大声で言った。

「そう。グラムだったね。覚えたよ。じゃあわたし訓練があるから」

そう言って姫様は去っていった。

「……で、どうすりゃいいんだよ？」

談話室のような部屋で巨大な消しゴムのようなレーションを口に入れ、グラムはサリドに尋ねた。

「ブリーフィングどおりで行くとなるとなんとかフロートの中に入って結界を生み出す源を壊す、だね」

「……生身でヒュロルフタームぶっ壊すよりマシか？」

「さあ、どうだろうね」

「そういやサリド。これって資本四国と社会連盟による戦争なんだろ？　どうしてレイザリー以外来ていないんだ？」

「敵も味方もそれぞれ別の戦争で忙しいんだろ。グラディアの一件みたいに」

「……実質一騎討ち？」

「うんにゃ、違うよ。実際は『チェス』みたいなもんさ」

「チェス？」

「うん」サリドは手に持っていたコーヒーを一口飲み、「つまり、王――ここでいえばプログライト皇帝を捕まえればいい。資本四国が先か、社会連盟が先か、ってね」

「どういうことだよ。資本四国と社会連盟がぶち当たるんじゃねぇのか？」

グラムの質問に、サリドはため息をつく。

「だったらプログライト帝国の本拠地となる『ビッグ・フロート』を攻め込まなくていいよね？」

「あ、ああ……。そうだな……」

グラムはようやく理解したようだ。

と、同時に甲高くサイレンの音が鳴り響く。

「まさかまたこの音をきくはめになるなんてね」

「サリド、その通りだ」

二人はそう会話を交わし、談話室をあとにした。

3

何もない、乾いた大地。

かつてあったであろう都市群の瓦礫が目につく。

「ひでぇな。これがすべて戦争の結果か」

「『戦争はなにも生み出さない』とか言ったのはどこの学者だったっけか」サリドはグラムに尋ねた。

「さあ。どうだろうね。もしそいつがそこにいたら、その通り人間は馬鹿です、とでも言ってやろうか」

グラムは端末に手をとり、言った。

「サリド、なにやってんだ。おまえ?」

「地形調査」サリドは端的に述べ、「人為的に作られた空洞を探してるんだけども。見当たらないね」

「サリド……? これなんだ?」

気づくとグラムはサリドの持つ携帯端末の画面をじっと見ていた。

「ん……?」サリドはグラムが言っていることに気づき、「あぁ。これはエネルギー反応を示すやつだよ。だから地上に青白い二つの塊があるだろう? それは僕らさ」

グラムは頭を掻いて、ひとこと「よくわからん」と不貞腐れたように呟いた。しかし、すぐになにか思い出したのか、

「……じゃなくて、深度７ｍ付近のエネルギー反応について俺は言いたいんだ」

「え？」

サリドはそれを聞いてもう一度携帯端末とにらめっこする。

するとグラムの言う通り、その場所には高エネルギー反応を示す緑の膜がみられた。

「……なるほどね。妨害電波を送っているのか、はたまたフロートの熱を逃がす管か……。行ってみる価値はあるね」

サリドがそう考察した。

「おいおいサリド待てって！　その確証はあるのか？　仮に後者だったら俺ら焼け死ぬぞ……」

「それでも、行ってみる価値はある」

「……分ぁーったよ。行きゃいいんだろ？」

「君がそういう性格で助かる」

「好きでこんな性格じゃないんだがね」

グラムはため息のように声を吐き出した。

4

先ほどの観測地点から南に８００ｍばかし進んだところに二人はいた。

「……どうしてここに来たんだ？」

「入口か、もしくは通気孔があると踏んで」

「通気孔……か」

グラムは遠い眼で空を見つめて言った。

「そんな暗い顔するなよ、グラム。どうせ簡単に見つかるからさ」

「こんな状況でも笑っていられるお前の方がおかしい。おまえオニの子なんじゃねぇの？」

「よく“オニ”とか言えるね。それは大神道会の信義じゃないの？」

サリドは笑って、答えた。

この世界はたしかに『資本主義国』と『社会主義国』の二強が争って切磋琢磨している世界だ。

しかしながら、その二強が支配出来ていないわずかな『中立地帯』ができていたりする。ここ、プログライト帝国も、そのひとつ。

プログライト帝国はもともとあった世界で、世界一人口の多い国だ

った。人の種類も世界一だった。

争いも絶えず、人が人を殺し、人の血で喉を潤す。いわゆる残虐な、世界がそこにはあった。

しかしそれも核戦争によって大半が滅び、残った人類は団結し、今の世界を作り上げた。

「でも、争いは絶えなかった。絶えるわけねぇよな。もともと戦闘本能や他人と優劣をつけたがることなんて人間の遺伝子に昔から染み付いてることだしな」

「そうして強い、と弱い、が生まれた。弱い人間はカミという偶像にすがるようになった……。まあ、それが結果として神殿協会や大神道会といった二大宗教が生まれたんだけどね」

「……サリド。話をぶったぎるようで悪いが見つかったのか？　入口は」

グラムが尋ねると、

「ああ。見つかったよ」とサリドは笑って答えた。

5

そこにあったのは小さなマンホールだった。

そして扉を開けると、そこには人一人がやっと入れる縦穴があった。

「もうちょいマシに隠せよなー。まあ、あいつらもまさかこんなところから潜入するなんて誰も思ってないだろうな」

サリドはそう言って、梯子を降りようとして――しかしそれをやめ、訝しげに中を見つめた。

「……どうした？」

グラムはサリドの行動に疑問を抱き、尋ねた。

「……いや、なんでもない」

そう言って、サリドは縦穴を降り始めた。

縦穴はそれほど深くなく、五分と降りる内に通気孔らしき空間にたどり着いた。

「……ひでぇ匂いだ。鼻が曲がるくらいだぜ」

グラムが鼻を触りながら、言った。

サリドは端末からアンテナのようなものを突き出し、「そうだね。でも食べ物か何かが腐った匂いだから、有毒なガスとかではないと思うな」

「なぜそんなことが言える？」

「グラム。そろそろ自分のもつ携帯端末の機能くらい覚えておこうぜ。この端末にはそういうのを測るセンサーがあるんだよ」

「へえ、初めて知ったな」

グラムは携帯端末を適当に弄りながら、言った。

「んじゃ、向かいますか」

サリドはそう言って歩き始めた。

そのころ、ベースキャンプにいたリーフガット・エンパイアーはノートパソコンを開いて何かを見ていた。

「……遅いわね……。そろそろきてもおかしくないのに……」

彼女はとある資料を見ていた。

それは、これから来るはずであろうヒュロルフタームパイロット、ノータの資料。

「『蟻蜂（ぎほう）の騎士』……か。しかも『第2世代』のヒュロルフターム、

ユローに乗っている……」
彼女はため息をついて一言。
「せめて設計図的なのをつかめれば今後の直接戦争に役立つのだけどね」
そのときコンコン、と言葉を遮るようにドアがノックされた。
「どうぞ」
リーフガットが入室を許可すると、扉は開いた。
その入ってくる姿を見て、リーフガットは驚いて何も言えなかった。
「すみませんね。我が国は『資本四国』の中でも情報統制が厳しくてですね。このような不意打ちのようなことをしてすいません」
そこにいたのは――10歳くらいの女の子。
緑色のぴちぴちの防護服が彼女の体型を強調している。
「……ライバック共和国第五ヒュロルフタームパイロット・ノータ、アリア・カーネギーですね」
リーフガットは、静かに書類を見ながら言った。
「ええ。間違いありませんよ？」

「女性……よね」

リーフガットは小さく呟いたつもりだったのだが、アリアはそれに反応し、「女性ですが、何か？　私はあなた様みたいにそんな大きい“脂肪のかたまり”をつけてはおりませぬ故。だいたいそんなのあったら肩が凝りますし、コックピットが狭苦しく感じますわ」

鼻をヒクヒクと震わせながら、言った。

「しかし……『蟻蜂の騎士』が来るなんて。敵はそんなに強いのかしら？」

リーフガットは机上の紙の書類を整理整頓し終えて、立ち上がった。

「……強い？　そんな簡単に言い表せるほどの敵じゃないわ」

「それは、いったい？」リーフガットは一瞬考え、その言葉を口にした。

「……メタモルフォーズ」

アリアは唇をほとんど動かさず、ただそれだけを言った。

続けて、「神話上に出てきた、と言われる『神の使い手』。人によっては『神獣』とも言うかもしれないけど、それを知るのは軍でも一握りの存在」

「その、メタモルフォーズが、敵？」

「いいえ違うわ。確かにあれはメタモルフォーズの形を為してはいるけれど、」

「けれど？」アリアの言葉が一旦途切れ、不審に思ったリーフガットが尋ねる。

「けれど、あれは違う。神話によればあれの放つ咆哮は下手すればこのプログライト帝国を一瞬で消し去る程の力を持っている。でも、そんな素振りはない。……ただ、それだけのこと」

「つまり」リーフガットが机に手をやって言う。

「あれは、偽物？」

リーフガットの質問にアリアは笑って、「偽物、というか劣化版のほうが近いかな。と言っても我々にそれを研究する術がないがね。まず肉片からでもほしいところだ」

それを聞いてリーフガットは、アリアに悟られないようにではあるが、内心驚いていた。

（つまりグラディアでサリドたちが倒したのは偽物。あの肉片を調べれば何か解るかも、ということね）

そんなことを考えながら。

「……ところで、なぜこの情報を簡単にも教えてくれたのかしら？」リーフガットは薄汚れた銀のコーヒーカップをコーヒーマシンに持っていき、エスプレッソのボタンに手をかけて言った。

「……我々だけ知っててもフェアじゃありませんからね。なにせ今回はレイザリーとの共闘。精々足を引っ張らないようにお願いしますよ」

そう言ってアリアは部屋を後にした。

一人残ったリーフガットは苦虫を潰したような表情で出来上がったエスプレッソをちびちびと飲み始めた。

6

そのころサリドとグラムは通気孔を潜り抜け、なにかの施設にたどり着いた。

直方体の機械がたくさん並んでいて、それら一つ一つが赤やオレンジや緑、といった色が点滅したり激しく光ったりしている。

「ここは……何の施設なんだ？」

グラムが天井のほのかに光る蛍光灯を見て言った。

「携帯端末は圏外だからリアルタイムの情報は入らないけど、たぶんここがビッグ・フロートの真下じゃないかな」

サリドは携帯端末のタッチパネルを触りながら言った。

「敵のアジトの真下か。こいつぁ簡単に着くもんだな」

「油断するなよ。グラム。いつどこに敵がいるかわかんねぇからな」

そんな瞬間は、そう遠くはなかった。

刹那、グラムの首筋に冷たいものがあてられた。鋭く、冷たいものが。

グラムはそれに気づき振り向こうとした――が、あてられた冷たいものを見て、それをやめた。

「……どうやら襲撃のようだ」

サリドは何もできなかった。いや、しようと思えば出来たのだろうが、グラムの首筋にある鋭く冷たい刃がそれを許さなかった。

抜かった。よく考えれば社会連盟は資本四国などとは違って専門の傭兵部隊がある。仮にそれでないにしろプログライト帝国は少ないながらも皇帝の私設軍があることはブリーフィングで聞いていた。なのに、なにも対策をしなかった。誰が悪い？　無論俺が悪い。何も考えず通気孔という唯一であろう入口を発見して張り切っていたばかりに――！

「あ、あのー？」

そこでサリドの思考暴走が唐突に停止した。なぜならサリドとグラム以外――即ち襲撃者――の声が聞こえたからだ。

その声は資本四国の公用語である英語であったものの、なにかアクセントがおかしかったり、なんというか、英語を習いたての人間が話しているような、そんな感じだった。

「だからですね？　我々は、このプログライト帝国を、内から、潰そうとしている、ただそれだけの、ことなんです」

片言の英語で、その黒に身を包んだ人間は言った。

一時間前。

結果から言えば襲撃者は味方だった。ただプログライト帝国を内から潰そうと試みて半ば個人的に活動していたそうだが、今のところは秘密裏で表立った活動が出来ていないようだった。そしてなかば

諦めかけていたようだが。
そこでサリドたちが潜入してきた。
即ち敵軍が、ここを潰すために、いや正確には『結界』を壊すためにやってきた。それに便乗しない手はない。と考えたらしい。
こうしてその人間はサリドたちを襲撃して、話の場を設けた、というわけだ。
「……話は解った。しかしなぜここにニンジャがいる？」
グラムはようやく口を開いて、言った。

ニンジャ。

それは古来より暗殺術や潜入術を学んだまさにアサシン的存在。
その元祖はかつてあった国、ニッポン。
今はレイザリーに取り込まれ、レイザリー王国ニッポン自治区となってはいるが、未だにその文化は生きている。そしてその文化はレイザリー王国の人間にも浸透しつつあった。
畳、抹茶、米を食べる文化、日本語などがそのいい例だ。
ニッポンは、『核戦争』前から生きる数少ない国の一つだ。なぜ生き残ったのかは判らない。噂には『冷凍保存した旧人類がいる』とか訳のわからぬ話があるくらいだ。

「なぜ、私たちニンジャがここにいるか、ですが」

その人間は綺麗な、声で話した。

口に布をあてているせいか、少し声が聞こえずらい。

「……すいません。一応、外すのが、常識でしたね。それと、日本語は、話せますか？　聞き取れますか？」

人間は布を外しながら、聞いた。それにサリドたちは視線を外さずに頷いた。

驚いた。

彼、いや彼女はくの一だったのだ。

くの一、とは女のニンジャである。

「……話を続けます。我々は3年前のプログライト潜入作戦のメンバーでした。たしかに我々ニンジャならば誰にも気付かれずに潜入することは簡単に出来ますからね」

「……仲間は？」

「先ほどのあなたたちを襲った時にいた二人だけです」

「なるほど。戦力が倍にはなったものの、それでも四人……か」

「プログライト帝国の要だけあって迷いやすいですし、罠もありますし、敵も多いです……。我々もやっと11Fまでの内部しか解っ

てないんですよ」

「１１Ｆか……」

サリドはただそれとなく呟いた。

7

そのころ、乾いた大地には二体のヒュロルフタームが蠢いていた。

ひとつは、陸も海も川も山もある程度の力を発するスタンダード型。俗に言う『第1世代』。

かたやこちらは地上戦に特化した『第2世代』。

この二体が組むことによってなかば戦局は決まったようなものだ。

なぜか？

相手は一体しかいないから。しかもヒュロルフタームじゃない。劣化版“と見られている”ものだ。

「……手を引っ張らないようにお願いしますわね。オホホ」

とか、お嬢様のように笑っているのは『蟻蜂の騎士』アリア・カーネギー。

「あなたこそ第2世代という力に振り回されないようにね？」

眉間に皺を寄せながら、言うのが『姫』。

ヒュロルフタームさえ抜きにしてしまえばただの可愛い喧嘩で済んでしまうがヒュロルフタームがあるために、それは、世界を滅ぼす

ことにもなりかねないのだから。

ところで、姫様が乗っているヒュロルフターム・クーチェ、と蟻蜂の騎士が乗っているヒュロルフターム・ユローにはたくさんの差違がある。

まずは足下。クーチェは海上でも楽に行けるようにフロートが簡単に装着できるように普段地上から2mほど浮かせている。これは『地球は巨大な磁石である』という学説に基づいて考えられたものであって足の底に強力な電磁石を組み込むことによって浮かべる。

それに対してユローにはそんなものはない。なぜなら、地上戦に特化したヒュロルフターム。クーチェも浮上の理由が海上時のフロート装着時なので、ユローはフロートを装着する必要がないからだ。

次は武器。クーチェはスタンダード型と言われているくらい平均になんでも装備が可能だが、そこまで“グレード”の高い武器を装備することができない。

グレード、とは武器の威力を示していて、これが高ければ高いほど、強い武器である。

一方ユローは装備できる武器の種類が限られる代わりにグレードの高い武器を装備することができる。

この二つにこんな違いがあるのは、ただ造られた国の技術の問題ではない。

ただ、“進化”しただけ。既にレイザリーでも第2世代はできてい

る。

ならば、なぜ？

ノータは、一つのヒュロルフタームにしか乗ることが出来ず、二つ以上のヒュロルフタームに乗ることは難しい。

ヒュロルフタームを発表したヨシノ博士の論文の一節である。

ヒュロルフタームとノータはノータが操るため、ヒュロルフタームが放つ微弱電波とシンクロする必要がある。

そのためにノータはヒュロルフタームに精神の波を合わせる必要があるのだ。そんな簡単にできることではない。とてつもない時間にとてつもない苦労、とてつもない精神的疲労がかかる。

要するにヒュロルフタームはノータさえいなければただの赤ん坊。考えることも出来なければ、本能のままに行動する。

8

そこに、それがやってきた。

『第1世代』と『第2世代』。二体のヒュロルフタームがいるのにも関わらず。

ただ、それはその普通なら最悪であろう状況を鑑みず、やってきた。

「……やってきましたわね」

「えぇ」

二人のノータは会話を交わす。

「じゃあ……、まずは、私からっ！！」

そう言って蟻蜂の騎士が乗るヒュロルフターム・ユローはその砲口に光を溜め込む。

「粒子砲……？！　さっそくそんなものを使ってエネルギーは持つの……？！」

「おほほ、ご心配のようなので先に申してあげますが、私は予備バッテリーを常に持っていってるのですよ。だから常に最大出力が可能になる！！」

そんなことを話している間にも、粒子砲の中には光がどんどん集まってくる。

そして、ついには。

粒子砲が、劣化ヒュロルフタームに向かって撃ち放たれた。

たしかにヒュロルフターム・ユローの放った粒子砲はヒュロルフターム擬きを命中していた。粒子砲は摂氏３５００度。その気になればヒュロルフタームの装甲をも融かすことができる。

筈なのに。

その擬きはびくともしなかった。

「まさか……。この私のヒュロルフタームの粒子砲を耐えた？！」

蟻蜂の騎士はこれまでに見たことのないほど慌てていた。当たり前なのかもしれない。これまでどんな戦闘においても冷静沈着、時には味方をも平気で撃ち抜く、と言われていた彼女が、こうも慌てているのだから。

予測範囲外の事態。

彼女ら二人はそう考えた。

「ならば……」

そう言って姫はコックピットにあるレバーを引く。

ジャキッ、という金属と金属が擦り合わさったような音が響く。

「……これしかないわ」

『リリー・ダレンシア少尉！　なにをするつもり？！』

気づいたら通信が入っていた。それは上官のリーフガットからだった。

「粒子砲がだめなら、コイルガンを撃つ。それでだめならレールガン。手はまだまだある」端的に述べ、通信を切った。

……のだが。

『ダメよ。リリー。それは許されない。たとえ「ノータ」としても、その命令は受理されない』

「闘わずに指揮だけしてるあなたがよく言えることですね」

リリーの声は平坦だったが、それは明らかに怒りの表情が入っていた。

『だめよ。リリー。それは絶対に「さよなら」

リーフガットの話が終わる前に彼女は通信を強引にシャットダウンして、

砲にためていたエネルギーを一気に射出した。

9

撃ち放ったのはコイルガン。

コイルガンとは電磁石のコイルを用いて弾丸となる物体を加速、発射する装置のことだ。このヒュロルフタームに使っているコイルガンの原理はとても簡単で、弾丸を走らせる細長い管を包み込むように一定間隔にして複数個のコイルが設置されており、そのコイルに電流を流すことで発生する磁力を利用して弾丸を素早く引き、段階的に速度を上げ、射出する。といったものだ。

まるで音速の戦闘機が走ったあとに発生する、ソニックブームのような衝撃と音があたりに響いた。

それはビッグ・フロート内にいた二人にも例外なくやってきた。

「……なんだ。今の轟音」

「グラム。ここから外が見えるみたいだ」

サリドとグラムはあのニンジャに連れられ、ひたすら長い螺旋階段を上っていた。なんでもここが一番警備が薄いんだとか。

窓を開けるとそこに見えたのは、ヒュロルフタームが二体と、グラディアで見たような擬きが一体。

数から行けば勝てる筈なのに。

なぜかそこにはところどころボロボロの二体があった。擬きだけが綺麗な姿を保っている。

「おい、グラム」

不意にサリドが呟いた。

「どうした。もしかしてこの風景に圧巻されてるとか？」

「馬鹿野郎。そんなわけないだろ。擬きの足跡を見てみろよ」

「は？」

グラムがサリドに言われて、足跡を見ると、

そこには、“なにもなかった”。

「足跡が……ない……だと？」

「そう」サリドは笑って頷き、「おかしいことだと思わないか。あの二体ですら空気の急激な射出とかで足跡は出来てるにも関わらず、擬きにはできてない」

「まさか……」グラムは一つの結論に辿り着いた。

どうやらそれはサリドも同じようで、

「あぁ。そうかもしれない」

一息。

「あれは幻影で、本体はどっかにあるよ」

「ちょっと待てよ。そしたらあの二人はそれを知らないで……」

「だろうね。あのまま無駄にエネルギーを射出し続けて空っぽになった隙を……窺っているのかも」

「おいサリド。このままじゃまずいぞ。どうするんだ？」

「どうするもこうするもないよ」

サリドは通信機に手をかけて、言った。

「僕らがどうにかするしかないだろ？」

10

サリドは通信機をてにとり、どこかに通信を始めた。

「サリド・マイクロツェフから本部へ！！」

「はい、どうした？　サリド」

なぜか通信に答えたのはリーフガットだった。

「なぜリーフガットさんがそこにいるかは知りませんけど単刀直入に言いますね。今ヒュロルフタームが戦ってるのは幻影です！！本物はどこか別のところに」

サリドがそこまで言ったとき、不自然なノイズがかかりはじめた。

「あれ……？　つな……い？　とりあ……れわ……んぞう……」

リーフガットが聞き取れたのはここまでだった。

「迷惑をかけたようで失礼する」

ノイズがひどくなったあと、ようやく回復して、リーフガットはもう一度通信をとろうと思ったときのことだった。

そのあとに聞こえてきたのは、壮年の嗄れた声だった。その声はリーフガットも聞き覚えがあったようで。

ヴァリヤー・リオール。
レイザリー王国で上院議員を務めていて、『四天王』という実効支配組織の一員でもある。
（なぜ四天王直直に通信を……？）
そんなことをリーフガットは思っていたわけだが。
「先ほどサリド・マイクロツェフ、グラム・リオール両氏が流した情報は確証を掴めていない。彼らは劣化ウラン弾による放射線被曝によって『戦争症候群』に陥り、論理的思考力と記憶力が低下して、錯乱したとみられる。繰り返すが先ほどの情報は間違いの可能性が高い……」
そこで、通信は途絶えた。
通信は、無論サリドたちにも聞こえていた。
「畜生！！　あのくそ親父いったい何言ってやがるんだ？！」
グラムはサリドから通信機を奪い取り、
「おい！！　聞いてるか！！　俺たちの言ってることは嘘じゃねぇ！！　だれか応答しろ！！」
「無駄だ。グラム。もはや誰もお前の事を聞かぬよ？」
「……じじい……！！」

「ほうほう。遂にはそう呼ぶようになったか。親は大事にしろよ？」
「お前なんか親と呼べるか！！　貴様こそ虚偽の情報を流してどうするつもりだ！！」
グラムは通信機に吠えた。虚しく廊下に声が響く。
「……知っているか？　南のリフディラのレジスタンスの活動が活発化していることを？」
「？」サリドは聞いたことに首を捻る。
「お前らの『ヒュロルフタームを素手で倒した』勲章は全世界に知れ渡った。それによって『人間でもヒュロルフタームは倒せる』と認識されてしまったのだよ？　そんな“偶然によって生み出された”認識によって世界の秩序は崩れつつあるのだよ？」
「だから俺たちを都合よく殺すというのか？！　『戦争で勝つのはヒュロルフターム』と明確に位置づけるためにか？！」
「……人類の歴史には犠牲を伴うのだよ。それを解りたまえ」
ヴァリヤーは、さらに淡々とした口調で語る。
「なぜ解ろうとしない？　強いものが、この世界を支配するのだよ。それを覆してもらっちゃあ困るんだよ」
「だから……殺すのかよ？　でもここにヒュロルフタームはいないぜ？」

それを待ってたと言わんばかりにヴァリヤーは笑いだし、

「なにも殺すのはヒュロルフタームとは決まっておらぬよ？　今二体のヒュロルフタームが戦っている敵の本体は一体どこにいるのかねぇ？」

「……まさか！！」

サリドが言った瞬間。

ドゴォォォォン！！　と何かが爆発したような音が、響いた。

11

「なんだ？！」

ニンジャのひとりはクナイ――彼らがよく使う小刀のことらしい――を構えて言った。

「……お出ましだな」

サリドはそう呟き、ウエストポーチからなにかを取り出した。

「おまえ、なにを……！！」

「手榴弾だ。場合によってはこれを投げて目眩ましのかわりにする」

ズゥゥゥン、と地響きが、さらに大きくなっていく。

「……ヒュロルフタームか？　それともグラディアで闘った生物兵器か？」

「『メタモルフォーズ』ですね」ニンジャは端的に答えた。

「メタモルフォーズ？」

「ええ。一般には、神の使い手、とも呼ばれる、巨大な獣。一説によれば、一回の砲撃で、国がひとつ消せる、とも言われるくらいらしい」

ニンジャの声はとてもまっすぐで冷たく、まるで機械のような声だ

った。

それは彼らに潜む恐怖を後押しするような、そんな感じでもあった。

ついにそれは、姿を見せた。

「これは……魔神？！」

サリドは思わずそう呟いた。

壁を崩して出てきたのは、人形の何か。しかし、そんな簡単に明言できるものではなく、例えば肩には大きな棘が五、六本生えていたり、顔は般若の面のような険しい顔をしていた、要するに『人のようで人でない』何かが、そこにはあった。

「おいおい……　いくらなんでもこいつらは倒せねーぞ？！」

グラムが頭を抱えながら。

だが。そう呟いて彼は何故かかけていたサングラスを外して投げ棄てた。

「やるっきゃねぇんだろうな。なんせそれが俺らの仕事であり命令だからな」

12

「「行くぞっ！！」」

二人は叫んで、その“魔神”に突っ込んでいく。

まず、二人は小型の銃を取り出しそれを魔神に向けて撃ち放った。

ズドン！！　と何らかの衝撃で車のバンパーがへこんだような音を立てる。

しかし、それはびくともしなかった。

「ならばこれなら……！！」

そう言ってサリドは手榴弾の安全装置を引き抜きそれに向かって投げ棄てた。

「……っておい！！　こんな狭い空間で手榴弾なんか爆発させたら俺たちまで被害を被るぞ？！」

グラムが手榴弾を投げる前にそんなことを言っていたような気もしたが、それは完全に無視をした。

刹那。

目映い光とともにサリドたちは後ろへと衝撃で押された。

「いたた……」

サリドは目を覚ました。

グラムたちも気を失ってはいないものの、倒れていた。

「メタモル……フォーズは？」

サリドは立ち上がり、あたりを見渡した。

まわりは、手榴弾の爆撃によってもたらされた土煙で視界を遮られていた。

ポタリ。

どこからか地下水かなにかの雫が落ちたような、そんな音がした。

そう遠くない距離と判断して、サリドはその雫が落ちるほうへ向かった。

そこまでいって、サリドはふと思った。

『ここはヒュロルフタームの戦いが見れるほどの高さなのになぜ水の雫が落ちているのか』ということに気がついたのだ。

「……なんで雫が……？」

その答えは、直ぐそばにあった。

そこにいたのは。

傷を負って、そこから大量に血が出ているニンジャと、

それに押さえ込められているメタモルフォーズの姿があった。

「おい！！」

サリドの声にニンジャは気付いたのか、傷付いて血にまみれた顔で笑った。

それは太陽が輝く畑で育てられた一本のひまわりのように。

無垢な、表情。

メタモルフォーズは、もう動かないようだった。

「……大丈夫か？」

サリドの問いかけにニンジャは僅かに頷いた。

「なら、いいんだが。えーと……」

「ストライガー」

「？」

「ストライガー・ウェイツ」

「あ、あぁ。名前ね。因みに俺の名はサリド・マイクロツェフ」

「よろしく」

「ああ。もう終わったがな」

そう言葉を交わして、二人は握手をした。

13

そのころ、リーフガット・エンパイアーは書類の山と格闘していた。

「……怪しい」

リーフガットは書類の山からとある書類を取り出し、言った。

そこには『ヒュロルフターム・プロジェクト第85次報告書』と達筆なコンピュータ字体でかかれていた。

そこにはこう書かれており――

――1年前、ゼロ号機の暴走により死去したヨシノ博士の娘はヴァリヤー氏が引き取ることとなり、我が委員会の案件もようやく一つ減った。

――次はヒュロルフタームの量産である。これは機械さえあれば出来ることだが、“もうひとつの”核がない限り難しい。我々が最初から望んでいた『十二使徒をヒトで作る』ことはできないのか……。まだまだ試行錯誤が必要だ。

――なので、我々はもうひとつの方法を思いついた。それが『チルドレン・ノータシステム』だ。これは、ヒュロルフタームの量産機に装着されない『オーレズ』の代用のため、人間のノータをたてて、そのまま操舵などを出来るようにし、オーレズ無装備でも装備したヒュロルフタームに事変わりなく使えるようにするということだ。

――直ぐ様、我らは既に完成割合を満たしていた一号機から四号機のノータを決めることとした。決めるには、全人類から無作為、というわけにもいかない。寧ろ問題はそこなのだ。そこで派遣・調査院を設置し、そこのメンバーがノータに足る能力を持つ子供を選別していった。

――そして、ようやくノータが決まった。彼ら彼女らはまだ幾ばくもない年齢の者達だが、ヒュロルフタームとの同調を考えればそれでいい。

――彼らのことは、育成機関に任せておく。どうせこれから軍の狗だ。ちゃんとした教育もする必要はない。軍に必要な教育さえしておけばいい。

文書を読み終えたリーフガットは、眠そうな顔をしていた。

（さすがに３０時間はきついわね……。少し仮眠でもとろうかしら）

とふとリーフガットは立ち上がって、

異変に気づいた。

「やけに、静かね」

そう。今まで外ではヒュロルフタームたちがドンパチ、コイルガンを放ったりしているはずなのに。

まるで何もないかのように静かだった。

（……終わった？）

リーフガットは思って、そばにあった扉を開けた。

しかしそこには、リーフガットが予想したとおりの状況があったわけで。普通の通路、青軍服の人間たちが慌ただしく歩いていた。

「私の思い違いだったのかしら」と呟くようにリーフガットは言って、自分の部屋に戻っていった。

ただ、それだけのこと。

14

そのころ、ヒュロルフターム。

「あら……。動きが止まりましたわね？」

「本当だ。どうしたのかしら？」

二人のノータは話をしていた。

そして結論を打ち出した。

この敵はもう死んだ、と。

キャンプベースでは、宴が行われていた。なんでも勝利祝いだとか。

「どうせ本国に帰ったら盛大にやるのにどうしてこのレーションだけで宴をしようと考えるのかねぇ。はやく帰ってフライドチキンが食いたいよ」

グラムは特大レーションにかじりつきながら、言った。

「はっちゃけたい気分なんだろ。たぶん」

サリドはいつものサイズのレーションをスプーンで掬って一口食べた。

「それはそうだな。ま、俺たちもいらん嫌疑が外された祝いという

ことだ」

「なんの祝いだよ。元々知らなかったし、別にどうでもいいんじゃないの？　少なくとも俺はそんなかんじにプラス思考で考えているけどさ」

サリドはまた、レーションをスプーンで掬って言った。

「ふうん。そんなもんか」

「あぁ。そんなもんだ」

「サリド、グラム。どうした。辛気臭い顔をして？」

サリドとグラムの会話に、私も混ぜてくれよ、と言わんばかりにリーフガットが混ざり込んだ。

「どうしたんですか。リーフガットさん。仕事は終わったんですか」

「始末書とか今までのことをワープロに打ち込むことを仕事とは呼ばん」

確かにそうだ、とサリドは思った。

「で……。あの騒動は誰が……？」

「サリド。それはあんたらが一番知っていることじゃないのか？犯人はヴァリヤーだよ。あいつしか今のところこんなことが出来る所業の人間はいない」

でもな、とリーフガットは続けた。

「証拠がないんだ」

「証拠？」

「そうさ。やつは確かに我々に向かって情報攪乱を目的とした通信を行なった“としている”」

「……としている？」

「考えてもみろ。あの通信は録音はしてある。声色の判定からもヴァリヤー本人と確定するだろう」

だがな。

「それが『ヴァリヤーが国を裏切るために情報攪乱を行なった』という証拠にはならんのだ」

「？！　なぜ……？」

驚きを隠せないサリドにリーフガットは続ける。

「世の中には著名な人間の声色のデータを手に入れて情報を攪乱させる、というテロの常套手段があってな。まず国のお偉いさんはそっちの方向から調べ始めるわけだ。その人間にとってはまさか『本人が情報攪乱のためにやっている』とはおもわないだろう？」

「確かに、その通りだ……」

サリドはもはやレーションを掬うスプーンの手もやめ、ひとり項垂れていた。

「まあ、そんな簡単に項垂れて、諦めるんじゃねぇよ」

リーフガットは手に持ったマグカップをどこかに置いて、

「あんたらは十分頑張った。一先ず休め。いつ戦争にまた駆り出されるかわからん時代だからな」

リーフガットは笑って言った。

サリドは彼女の笑顔を初めて見たような気がした。

リーフガットの助言通り、帰りは休むことにした。床について、目を瞑る。でも、なんだか眠れなかった。

なんだかおぞましい感じがして、寝ることを許されなかった。

そして、ひどく寒い。四季が豊かな本国に来た証だろう、とサリドは納得し、ようやく深い眠りについた.

1

本国に帰って表敬が終わったサリドたちには一週間の休暇が設けられた。

「サリド、聞いたか？　俺たち一週間休みだとよ！」と、スイッチをオンオフしながら、グラム。

「そうか。でもその感じじゃ一週間過ぎるとまた戦場に駆り出されるっぽいな」と、なにか壊れた機械をドライバーやらはんだごてを使って直しながら、サリド。

「というか……、お前は何をしているんだ？　さっきから中毒のありそうな匂い吹き出して」

「！！　まさかこの人ははんだの危険さを知らない？！　はんだというのは体内に入ったら出されずに蓄積されていくものなんですよ？！」

「えっ、まじで……。でもサリド、お前は大丈夫そうじゃん」

「俺は透明なマスクつけてっからいーの。意外とこういうのは常識だぜ？」

サリドはそう言って、また作業に戻った。

そんなこんなで休日一日目を迎えたサリドとグラムである。

「なあ、サリド。毎日ヒュロルフタームの勉強したいのはわかるが、今日くらい遊びに行かねぇか？」

グラムが、そんな提案をしてきた。

サリドは暫く黙っていたのだが、

「……そうだな、それもいい」

ようやくサリドはＯＫサインを出した。

2

グラムとは次の日の朝、首都から少し離れたショッピングモールで会うこととなった。

ショッピングモール、といっても仮に戦争で爆撃されないように地下に何層も分かれている、いわば“地下都市”の中にあるのだが。

そしてサリドは、その日、そこにいた。

サリドはそこまで私服を気にしないタイプなのか、ジーパンにTシャツ、それにウエストポーチという軽装だった。

「……まあ、どこ行くかわからんしな……。デートとかじゃあるまいし」

サリドは独り言のように呟いた。

「よっ。やっぱ早かったな」

サリドとの待ち合わせ場所にグラムがやってきたのは、それから五分ほど経ってからだった。

「ああ。待ち合わせをしたからにはそのどんなに遅くても五分前には着くようにはしてるからね」

「そうか」

ところで。サリドが尋ねた。

「隣にいる女の子は誰なんだい？」

待ち合わせ場所にきたのはグラムだけではなかった。正確に言えば。

グラムの隣には女の子がいた。栗色の髪にキラキラとした瞳（輝いている、と言ったほうがいいのかもしれない。ともかく光が当たって輝いているのだ）、顔立ちも整っていて、水色のワンピースを着ていた。

「彼女は……？」

「あぁ。こいつか」グラムは後ろに振り向き、そちらのほうを指差して、そして言った。

「妹だ」

「い、妹？」

グラムの言葉にサリドの対応はとても冷ややかなものだった。

「そう。妹。俺の」

「まじかよ……。まさかお前に妹がいるだなんて……」

「その発言には少し問題があるんだが？」

グラムはすこし顔をしかめながら言った。

「あ、あのっ」

その話の中心にいた少女は、恥ずかしがりながらも、サリドに話しかける。

「ん？　どうしたんだい？」

サリドはそれに答える。

「いや、あの……。いつも兄がお世話になってます」

なんと丁寧にお辞儀までついている。

「出来る妹と出来ない兄、ねぇ……。普通逆じゃないの？」

サリドはグラムに話しかける。

「うるさい。なっちまったもんはしょうがないだろ」

グラムはつっけんどんに返した。

3

というわけなので、サリドたち三人はショッピングモールで遊ぶこととなった。

ショッピングモールはサリドたちが今までいたプログライトのベースキャンプ（あれでも一つの国がすっぽりと入ってしまうくらいなのだが）が二個ほど入ってしまうほどの大きさだ。とても一日では回り切れない。

「んじゃー、まずどこ行くか」

グラムがマップをつまらなさそうに眺めて、言った。

「お兄ちゃん、私洋服買いたいんだけど」

妹が話しかけてきた。

「あ、そう？　わかった。じゃあそこまで行くよ。キャティ」

グラムがそう言うとキャティは嬉しそうに小走りになって、通路の先に向かった。

「兄弟、っていいなぁ」呟くようにサリドは言う。

「そうか？　あれでも会ったらいつも喧嘩だぜ？　思春期の妹、って結構めんどくさいもんなんだ」

「そんなもんなのか？」

「あぁ」

そんな世間話をしながら二人もキャティの後を追った。

そのころ。リーフガットはとある場所にいた。

いつものように軍服じゃなく、黒いスーツでびしっとしている。ところで、ここは何処なのだろうか？

ここは、議員会館、と呼ばれる場所で、この国の全議員の事務所がある所だ。

彼女はその最上階にいた。そこには噴水やら小高い山やら、はたまた滝まで付けられた庭が広がっていた。

「これが事務所ねぇ……。もはや別荘じゃない」

ここにいる人間はただひとり。

ヴァリヤー・リオール。

先の戦争で妨害行為を行なったと見られている人間。そんな現在は自主的に中に籠っている。

「なにも工作していなければいいのだが……」

そう言って、リーフガットは庭の終着にある扉にたどり着いた。

「やぁやぁ。リーフガットくん。よくここまでやってきたなぁ」
扉を開けると、その嗄れた声。
ヴァリヤーの声だった。
「ひとつ、お尋ねしたいことがございまして来たのですが」
「まぁ、座るがいい。大丈夫だ。罠なんぞ仕掛けてはおらんよ」
ヴァリヤーがそう言うのでリーフガットはそれに従って近くのソファに腰かけた。
「……して、聞きたいこととは？」
「これ、読ませていただきました」リーフガットはカバンからある本を取り出す。
それを見てヴァリヤーは僅かに眉をひそめて、「いかんなぁ。これは書物庫に保管されていた、持ち出し厳禁のやつじゃないかね？こんなものを持ち込んで……、君も只では済まんだろう？」
「こんかいは委員会の協力を得た上です」
リーフガットは即座にそれについて返す。
それを聞いたヴァリヤーは思わず立ち上がった。
「まさか……！！　委員会は私を裏切って……！　こんなことを」

「なにを仰いますか？」

リーフガットは笑って、

「貴方が国を裏切ったんでしょう？」

「違う！　私はただ……っ。世界の安寧とヒュロルフタームのことを思って……」

「その結果のためにやったことが妨害か？　ほんと何を思っているのやら？」

「……もう、我慢ならん」

「ん？」

「許さん……　許さんっ！！　せめて貴様だけでも殺すっ！！」

そう言ってヴァリヤーは近くにあったボタンを押す。

「なんでわしがこんなビルの最上階にいるのか、わかるかね？」

ゴウン、と低い唸り声が部屋の中に響いた。

「まさか……、このためだったと……？」

そこにいたのは小型の人型戦闘兵器。

ヒュロルフタームだった。

4

そのヒュロルフタームはヴァリヤーを手のひらに乗せて、ウオオオオオン、と“雄叫びのような音”を出した。

その衝撃波にリーフガットは思わず足がすくんだ。

「……まさか、ヒュロルフタームをも操っていたなんて！！」

「ヒュロルフターム・プロジェクトの創始メンバーであった私を見くびってもらっちゃ困るなぁ」

ヴァリヤーはそう言って、コックピットの中に入っていく。

そして今度は、その声がヒュロルフタームに内蔵されている拡声器から発せられた。

「今まではこれを封印していたが……。もう我慢が出来ぬ……！！こいつを使ってレイザリーを中からつぶし、私だけの国家を作り上げる……！！」

「……そんなこと、ほんとうに出来るとお思いで？」

リーフガットは乱れた髪と服装を整えながら、さも戦場ではない、ここは日常空間であることを意識した上で言った。

「私にはヒュロルフタームを倒す馬鹿野郎どもがいましてね」

5

そのころ、ショッピングモールで遊んでいたサリドとグラムにもその雄叫び――本人たちにはそうと聞こえなかっただろうが――がはっきりと聞こえた。

「サリド。今の聞こえたか？」

「あぁ。地響きにしちゃぁ、生ぬるい、気持ち悪い音だ」

サリドは気だるそうな表情で言った。

戦闘は二人を待たせなかった。

直後。

ドバァァァン！！　と上から滝のように瓦礫が落ちてきた。

瓦礫の中心には、鉄球。

この世のものとは思えないほど暗い、鉄の球。

「なんだよ……。どうやら敵は待ってくれねぇよーだな！！　こちとらヒュロルフタームとの二連戦でやっと取れた休暇なのによ！！」

「あぁ。そうだ。だがグラム。ここで落ち込んでる場合じゃないとおもうぞー」

「落ち込んでるんじゃねぇ！！　怒ってるんだ！！　一体何処のどいつがこんなことしやがるんだ！！」

グラムは叫びっぱなし。

それでも、敵の猛攻は緩まない。

ドゴゴゴゴゴ！！　と鉄球は何発も撃ち込まれ、その度に天井の壁材が崩れ落ちる。

「もう許さねぇ！！　行くぞ！！　サリド！！」

「キャティちゃんは……妹はどうするんだ？」

「……」

しばらくそのことで二人は思考を停止していたが、

「大丈夫。キャティはここにいる。だからお兄ちゃんたちは敵を倒してきて」

強く、真っ直ぐな眼で、彼女は告げた。

「……そうか」

「うん。だから安心して世界を救ってきてね？」

キャティのその言葉を聞いて、二人は走り出した。

6

そのころヒュロルフタームの猛攻が地上にて続いていた。

「おのれぇ……！！　どいつもこいつも私の邪魔をしおって！！」

「如何なさいますか？」

コックピットには一人の少女が座っていた。

お姫様――レイザリー王国に所属するヒュロルフターム・パイロット――と同じくらいの背格好、まるでまな板のような胸まで同じときた。まるで双子のように。

その少女は機械のように、抑揚のない声で今一度尋ねる。

「如何なさいますか？」

「そうだな」ヴァリヤーは暫く考え、「まずは国の施設を破壊していくとしよう。そして……あわよくば『あれ』の回収を行いたい。それが出来ねばそれすらも破壊せねばならなくなるな」

淡々と語った。

そのころ、ショッピングモールから脱出したサリドとグラムは螺旋状の階段をひたすら昇っていた。

「……まさか非常用電源になっていたとは。エレベーターも動かないわけだぜ」

「地下だから無線も通じないしな」
グラムとサリドがそれぞれ言った。

「しかしいったい誰が？　まさか社会連盟と手を組んでレイザリーを潰す気か？」
「実は世界滅亡が目的だったりして……まさかそりゃねーか」
グラムはグラムで自己完結した。
「とりあえず気を抜けねーな。まだ姿貌（すがたかたち）がわからねーんだ。どういう戦いになるかもさっぱりわかんねーぞ」
「そうだね。それにどうやってレイザリーの中心まで来れたのかな……？　それも聞いておきたいけど」
「まぁ。行こうぜ。くそったれを潰す戦いの地に、な」
グラムはそう言って壁にあった非常用シャッターのボタンを押した。

7

「……どうなってるんだよ。これ……」

地上に出たサリドとグラムを待ち受けていたのは、黒い球体のようなものから手足が生えたような、ともかく、謎の物体がいた。

「……待ち伏せかよ！！」

そう言ってサリドたちは思いきり走る。

刹那。

ドゴォォォォン！！　と地下街の出入口が崩れさる音がした。

「畜生！！　あんな街中でコイルガンなんか撃ちやがって！！　あれがもたらす磁場がどれほどの影響をもたらすって知らねーのか？！」

サリドは叫びながらもコイルガンの咆哮から逃げるために走る。走る。走る。

「というかだ。サリド！！　なんでこんな街中に５０ｍ級のヒュロルフタームがいるんだ？！　格納庫にみんな保管されてるはずじゃねぇのか？！」

『これは、私独自の所有物だ』

背後から声が聞こえて、思わずそちらを振り返る。

声がする方向は――ヒュロルフタームからだった。

「なんだ？　最新型のヒュロルフタームには自動音声装置でも着いてるのか？」

グラムは驚いたように言った。

「いや、違うな。たぶんどっかにスピーカーがあってコックピット内のマイクを通じて……」

サリドがそこまで言ったときだった。

『ご名答！　まさかそんな簡単に解くとはね。ヒュロルフタームの設計士を目指しているだけある』

スピーカーからまたも嗄れた声が聞こえてきた。

「まさか……親父、か？」

グラムが慌てた素振りで話した。

一瞬の間があって、『私は絶望したよ。まさかお前が素手でヒュロルフタームを倒すことになろうとはな』

「……素手でヒュロルフタームを倒す。このことに何処で絶望を感じるって言うんだよ」

『解らないか？　前にも話したが、人間がヒュロルフタームを倒すことは「あってはならない」のだ。今までヒュロルフタームは最強

の存在、と呼ばれていたからな』

「……だからってな、それの結果がこれか？」

グラムはすっかり瓦礫の山となった街を眺めた。

『あぁ。そうだ。世界を元に戻すためにはどんな犠牲を払っても構わん。そして、その先にある事までもな……』

「ふざけんなよ」

グラムは声に抑揚をつけず、ただただ平坦な声で言った。

「なんでてめぇの勝手な野望のせいで街が破壊されなきゃなんねーんだ？　死ぬ必要のない人間が死ななければならなかったんだ？！」

グラムの叫びは地面を微かながら揺らした。

それでもヴァリヤーはひるまなかった。

「言いたいことはそれだけか？」

ただ、それだけを述べて。

8

とある少年は瓦礫の中に埋まっていた。

少年は母親と一緒に街を歩いていた訳だが、そのところでヒュロルフタームの猛攻に巻き込まれてしまったのだ。

彼は、彼の母親の名前を叫ぶ。何度も、何度も。

でも、母親は答えない。

少年にゾワッ！！　とこれまで以上には感じない悪寒を感じた。

――俺は死ぬのか？

少年はついこの前兵隊に入ったばかりでプログライト戦争にも出陣していた。今回は休暇だったわけだが。

――俺は死ぬのか？

その言葉だけが頭にリフレインする。

希望はどこにある。絶望はここにある。現実は絶望を、ここまでも簡単に、単純に、かつ恐ろしい方法で与えるものなのか。

少年は何かに取りつかれたように体を丸くして、そのまま動かなくなった。

――俺は……。

少年は決意する。

それは何かをも動かせない程の小さな意志だが、

一人の人生を変えるには大きな意志でもあった。

――俺は、生きたい！

そのころ、グラムとサリド。

「ほんと……、仲間だと心強いのだけど敵になると忌々しい……！！」

「リーフガットさん！」

「なぜここに……？」

サリドとグラムはそれぞれ違った反応をした。

それを見て、彼女は少しだけ笑った。

「……ヴァリヤーを追い詰めて、捕まえようとしたらこのザマよ！！　まったく、まさかあんなかくし球があるなんてね！！」

「あれはなんなんですか！！」

「あれは試作品のヒュロルフターム『第三世代』！！　コードはたしか」

『ビースト、さ。そうだったかな？　リーフガットくん』

リーフガットの代わりにヴァリヤーが述べた。

「獣……。即ち戦闘能力が第二世代と段違いなのよ！！　こいつに敵うのはヒュロルフタームしかいないし、第三世代も幻としてとらえられていた！！　だから細かい資料なんて、残っちゃいない！！」

精一杯の声で、リーフガットは叫んだ。

「第三世代……」

グラムとサリドはただそれだけを呟くことしかできなかった。

『驚いたかね？　この第三世代は対社会連盟用に制作された最高傑作！　貴様らなんかに簡単に壊せる代物ではない！！』

「ふーん。だったらそれじゃあ、」

サリドはウエストポーチのポケットのチャックを開けた。

「試してみようか」

サリドが手にとったもの。

それは手榴弾。

しかし、ただの手榴弾ではない。そんなものを投げても無駄、という前例があるからだ。

なのに、なぜ彼はその失敗すると決まってる道具を使おうとするのか？

『ハハハ！！　手榴弾だと？！　血迷ったか！！　お前らはそんなのは無駄だとグラディアとプログライトで学ばなかったのか？！』

「……何を勘違いしている？」

なにっ、と思わずヴァリヤーは小さく、だがサリドたちに聞こえるくらいに声を発してしまった。

サリドは続ける。

「だれも、『外を壊すのが目的』にこれを使うだなんて言ってないんだけど？」

そう言って、サリドは第三世代向かって手榴弾を投げつける。

刹那、

閃光が辺り一面に弾けた。

9

手榴弾は確かに爆発した。

ヴァリヤーが思った通り、“第三世代の外装の負傷は”一切見られなかった。

「閃光で一時的に視界を封じるか……。まぁそれもよかろう。しかしこちらにはセンサーがある。これがあればどこに隠れようと……」

ヒュロルフタームには何者がいないか探すために赤外線センサーや鉄分検知器、これは血などから何処にいるか判断するものだ、などがあり、常に稼働している。

しかし、今そのセンサーの反応を示すはずの画面が、

砂嵐と化していたのだ。

「？！　そんな馬鹿なッ！！　なぜセンサーが反応しない？！　……何故だ……！」

ふと、ヴァリヤーは思った。

サリドという青年が最後に放った手榴弾。

実はあれは『外にダメージを与える』ものじゃなく、

“ジャミングによって中の機械にダメージを与える”ものだったのではないか、と。

レイザリー王国は資本四国の中でも一番の技術国だ。仮にそんなものが作られていてもおかしくはない。

ただ、思ったのは。

仮に、それがあったとして、なぜあの青年は知っているのか？

そして。

手榴弾の爆発の一瞬の隙を狙って、近くのビル――どちらかと言えば瓦礫の山に近いのだが――に隠れたサリド、グラム、リーフガットの三人は、息を整えていた。

「……！！　あんなことするなら先に言っておきなさいこの馬鹿！！　思わず死ぬところだったわ！！」

リーフガットはサリドに食ってかかるように叫んだ。

「でもあのヒュロルフタームから逃げるためにはあれが必要だった。あれしか方法がなかったんですよ。何も言わなかったのは申し訳ないと思ってますけど」

サリドは息が切れているのか、途切れ途切れに言った。

「だからってあれはねぇよ……。なんでお前手榴弾なんか持ってんだよー！　ここは戦場じゃないんだぞ！！　お前はいつもウエストポーチに手榴弾を入れておかないと不安な人間なのか？！」

「いや、グラム。違うんだよ。このウエストポーチ、いつも持って

いってるから軍のとこにも持ってってるんだよね。……で誰かが悪戯でいれたんでしょ」

「危険すぎるなそれ！！　最悪自分のウエストポーチで爆発するんじゃね？！」

「でも今回は手榴弾入れた人間に感謝するわ」

「それは俺も同じだ。サリド」

グラムはそう返した。

「ひとまず逃げたが……、どうする？　にしても『フラッグ・ボム』の爆発時に発生する微弱な電磁波によるジャミングをするとはな。さすがの私も驚きだったぞ」

リーフガットがサリドに語りかける。

「兄ちゃんが武器開発に一役買ってましてね。たしか『オプグランドセキュリティ社』だったかな」

「オプグランド……。たしかリフディアに本社を置いていたな。神殿協会御用達の武器制作会社だったか」

神殿協会。

大神道会と並ぶ二大宗教として世界を蹂躙しようとしている組織。

――まあ表向きには『全知全能の神「ドグ」の御言葉によって世界を安寧に導く』ということらしいのだが、彼らは大神道会と違って神の名のもとに、と言って武力行使をもする連中である。

「……じゃあお前の兄は神殿協会なのか？」

「兄どころか家族全員が神殿協会ですよ」

サリドは忌々しそうに呟いた。

「……そうか。なんか済まないな」

リーフガットは何かを悟ってこれ以上聞くのを止めた。

刹那。

サリドたちが隠れていた瓦礫の山が爆発を起こした。

「サリド！！　逃げろ！！　お前が爆乳上官と話しているうちに第三世代の通信機器は復活したようだぞ！！」

と瓦礫の山から外を眺めて、グラムは叫んだ。

「やべぇ！！　つい話してたらこのザマだ！！　どうやってやつを倒そう！！」

「倒すよっか行動不能に陥らせたほうが早い気がするけどな！！」

サリドとグラムは走りながら、話す。

生憎、あの第三世代はプロトタイプだったせいか速度が遅い。それがサリドたちにとっては運がよかったことなのだろう。

「……待てよ。行動不能……か」

サリドは何かを思い付いたのか、

「そうか……。グラム！！　俺の言う場所を端末で調べてくれ！！」

そう言ってサリドはとある場所を言う。

「……お、おいっ！！　そこはたしか……」

「いいから調べろ！！　たしかこっから近いはずだ！！」

「……わかった」

そう言ってグラムは携帯端末に指を滑らしはじめた。

10

発電技術は少なからず向上しているとおもう。

昔は火力やら水力やら、あった。

一番パーセンテージを占めていたのは原子力。しかしこれは何度も問題がおき、暫く前に全廃となった。

今は、なんの力を使っているのか？

「たしか今は黄リンの非常に低い発火点を利用してタービンを回してるんだよね。圧力を操れば常温でも自然発火を起こしちゃうから」

「それでここにきたのか？」

サリドとグラムの二人は暗い廊下を走っていた。

「リーフガットさんは？」

「軍隊に命じていろんな戦車やらを連れてきて対抗するらしい。まぁ、それでも二時間が関の山かな」

「そうか。じゃあとりあえず俺らはさっさとあれとあれのある部屋を探さなくちゃな……。外の部隊が全滅してしまう前に」

「なぁ、サリド？　いったいなにを探しているんだ？」

――二人のいるここはレイザリー中央発電所。

レイザリー王国の全世帯の６割の電気を賄っているところだ。

「グラムさぁ。話の流れからわかんないの？　僕が何を使おうとしているか」

「……まさか」

サリドの思惑を知って、グラムは口が塞がらなかった。

「そうさ。それを使ってあのヒュロルフタームを破壊する。だから、君も少し手伝ってもらうよ？」

11

そのころ、外では激戦が繰り広げられていた。
かたや世界最強の装備、ヒュロルフターム第三世代。
かたやヒュロルフタームの製造によって発展を妨げられた時代遅れの武器。
勝ち目は、見た目の時点で一目瞭然だった。
「……これほどに、強いだなんて……！！」
『どうやら君は見くびっていたようだな？　第三世代の凄さを』
「……どうして動力源を取り払っても動くことが……」
『「コード・ビースト」』
ヴァリヤーの言葉を聞いてリーフガットは身震いした。
『名前だけなら聞いたことはあるだろう？』
「……いえ、意味すらも知っております」
リーフガットは深く息をついて、
「『ヒュロルフタームの抑えつけられていた真の力を引き出す』コードでしたかしら？」

『そうだ。そのコードをつかえばおおよそ無制限に力を使うことが出来る。しかしデメリットも存在するわけだな？』

「たしか、暴走をする――正確にはヒュロルフターム個別の認識で動く……。だからノータの意志が通用しない」

『その筈だったのだよ。第二世代まではな』

ヴァリヤーが笑いながら、話を続ける。

『もしも、もしもだね。ノータがヒュロルフタームに溶け込んでそれで深いところから操っているとしたら？』

「……！！　それは我々人類にとっては禁忌のはず！！　どうしてそれができる！！　サルベージできなかったらどうするつもりだ！！」

リーフガットは思わず第三世代に向かって叫んだ。

しかしヴァリヤーは声色を変えず、

『禁忌？　サルベージ？　そんなの関係ないだろう？　今私にとって必要なのは』

『「私にとって使えるか使えないか」だよ』

ヴァリヤーの言葉にリーフガットはうちひしがれていた。

「私は……、こんなやつの下に仕えていたのかっ……！！」

『……疲れたろう？　君には結構重荷を背負わせていたからなぁ』

「……なにを」

リーフガットがふと上を見るとリーフガットに向けて砲口が向けられていた。

恐らく、いや確実に、リーフガットを狙っている。

『君は今の今までがんばってくれたよ。私の計画の為にな。だから思うことなく死ね』

リーフガット目掛けてコイルガンが撃ち放たれる――！！

「……あれ？」

……はずだったのに、肝心の弾丸はリーフガットの体を貫いてもいないし、そもそも発射されたかも怪しかった。

『……なぜだ！？　なぜヒュロルフタームのコイルガンが効かない？！　この至近距離で撃てば避けられるはずがない！！』

ヴァリヤーが狼狽えていると、

『なにやってんだくそ親父。こんなとこでコイルガンを撃つとか何考えてるんだおまえアホなのか？』

発電所のメガホンごしに声が聞こえた。

『その声は……グラム！！　貴様いったいなにをした？！』

『何をしたって？　さぁね。俺は何にもしてねーよ』

グラムは、乾いた笑いの後、

『あぁ。発電機をフル稼働させてコイルガンの弾道を変えるほどの磁力を発生させたことだけかな？』

ガクン！！　とヒュロルフタームの機体が揺れる。コイルガンに装填されている金属に反応している。このままだと動きに制限がかかり、簡単に動くことができない。

『……』

ヴァリヤーは考えていた。

（まさか磁力を発生させるとは……。しかもコイルガンの弾道を変えるほど、だと？　そんなの無理に決まってる）

しかし。ヴァリヤーは思わずそれだけを口に出した。

（結果的に今、それが為されてしまった！！　このままだとまとも

にコイルガンを撃つことは難しいし、コントロールも不十分になっていく！！　さて、どうしたものか……）

「マスター」

不意に、無機質な声が聞こえた。

「う……む」

ヴァリヤーはその無機質な声に曖昧に答えた。

声は、続く。

「マスター。このあと、どういたしましょう。出力をあと１４．７８％上げれば動力炉を傷つけることなく磁力にとらわれることなく動くことが出来ます」

「……そうか」

「稼働、させますっ」

少女の答えと同時に、コックピットが小刻みに揺れた。

ゴウン、と音が響き、揺れはさらに増す。

12

そのころ、外にいたサリドたち。

「……あのままだと、また復活しそうだぞ?！　サリド、どうする！！」

「まあ慌てるなって、グラム。わかってるよ、それくらいさ」

そう言ってサリドはグラムに何かを渡す。

「合図と同時にこれをやつに向かって投げろ。その隙を狙ってコックピットに侵入する」

「サリド、おまえ何いってんだ?！　まじでそれをやるつもりか！！」

グラムの問いにサリドは大きく頷く。

「頼めるのはおまえしかいない。今から俺はあいつに向かう。それを確認して、五秒経ったら投げてくれ。わかったな?」

「……わかった」

グラムは頷いて、それを受け取る。

そして。

サリドは第三世代に向けて走り出した。

横から行くのでもなく、真正面から。

「？！　あいつ、馬鹿か？！　いくらなんでも真正面から行くだと？！」

グラムは双眼鏡から遠ざかっていくグラムを眺めて言った。

それは第三世代の中にいたヴァリヤーも考えていたわけで。

「マスター。正面からサリド・マイクロッェフと思しき人間が走ってきます」

「馬鹿な。この第三世代に素手で、しかも一人で挑もう、とでも？　そんなのは無理に決まっている」

「では、どうしましょう」

「どうもこうもない。コイルガンでも撃って恐怖を植え付けるか」

「……了解しました」

ノータは僅かに躊躇った後、改めて操縦かんを強く握った。

そのときだった。

パン、と。

銃声にも似た破裂音が響いた。

「？」

それを聞いて思わずノータは操縦かんから手を離した。

「お、おい！　何をしている！　さっさと彼奴に向かってコイルガンを……！！」

「無駄だよ」

冷たい、音がヴァリヤーの首筋に響いた。

ヴァリヤーはそれを聞き、狼狽えもせず、静かに尋ねる。

「……サリド・マイクロツェフか？」

その質問に対し、銃を持つ男はもう一度冷たい音を響かせ、言った。

「ああ。そうだ」

13

サリドたちがやった作戦は単純明解である。

まずサリドが真正面から敵に向かって囮になる（しかしあの二人もまさかサリドが真正面から行くとは思ってなかっただろうが）。

次にグラムたちから意識の離れる一瞬を使ってグラムが第三世代に向かって手榴弾を投げつける。

手榴弾による電磁波によって第三世代に取り付けられているセンサーが乱れている内にサリドが中に侵入しヴァリヤーを取り押さえる、といったもの。

……確かに、ここまでは作戦成功だった。

そう。“ここまでは”。

「さあ、どうする？」

サリドは未だに銃をヴァリヤーの首もとにあてて、言う。

「何がしたい？　何が望みだ。サリド＝マイクロツェフ」

「これはこっちのセリフだ。ヴァリヤー」

「国のトップに近しい人間を呼び捨てとはね？　君も覚悟のうえか？」

「うるさい。黙れ」

そう言って今度はヴァリヤーの頭に銃を置く。

ヴァリヤーは何をする素振りもなく、ただ両手を上にあげていた。

なにか手があるのか、と思っていたが手にはなにも握っているような感じもないので、その可能性は振り払った。

「さぁ、目的はなんだ？　あの子か？　それともヒュロルフターム第三世代か？」

サリドは尋ねると、彼は嗄れた声でこう言った。

「私はヒュロルフタームという人類の作り出した欠陥のある人間が好きなわけでもないしほしいわけでもない」

続けて、

「だがそれが私たち委員会の目的に合致するものと見なされば、なんだって使うし、なんだってする。人からモノを奪ったり、その為に殺したり、な」

「委員会？」

サリドは怪訝そうに顔を歪め、

「ああ。何れ人類の要へとなる存在」

「『フォービデン・アップル』だ」

「……『隠された林檎』？」

「……辿り着けるかね？　我々の求める真実まで？」

ヴァリヤーは笑っていた。

首に銃口を突き付けられ、いつ命を落としてもおかしくないのにもだ。

「……『知恵の木の実』……」

サリドは思い出したように呟いた。

「……それさえわかれば我々の目的に大分近づいたと言えるな」

そう言ってヴァリヤーはサリドが気を緩めた一瞬の隙を狙って、横腹に拳をあてた。

「ぐ……ぁ……」

「君にここまで潜入させられた以上、計画の実行は難しい。私はここで逃げさせてもらうよ」

「ま……て……。この子は……！！」

「あぁ。私が消えて暫くしたら催眠がとけるだろうから。慌てず待てば良いのじゃないのかな？」

気づくとヴァリヤーの背中には簡易のパラシュートがついていた。

「……待て！」

サリドが言ったのも虚しく、ヴァリヤーは大きく扉を開け放ち、そこから飛んだ。

14

「『フォービデン・アップル』ねぇ……」

第三世代を安全に停止させたのち、サリドはリーフガットとグラムに今までのことを話していた。

「なにかわかります？　リーフガットさん」

「たしかヒュロルフターム・プロジェクトの管理団体がフォービデン・アップルという名前だったわ。でもあの団体は三年前に解散させられたと聞いたけど」

「もしかしたら、今回の一連はフォービデン・アップルが関係あるかもしれないんです」

「……だろうな。ヴァリヤーが国を裏切ったのではなく、フォービデン・アップルそのものが裏切った、ということなのか。いや、そもそもそれはなんなんだ？」

「たしか『知恵の木の実』と言ったあのとき、『それさえ解っていれば正解は近い』などと言われましたけど」

「それを早く言え馬鹿」

リーフガットは言葉よりも先に拳をサリドにぶつけていた。

リーフガットは一回咳払いをして、「……ともかく『知恵の木の実』。まためんどくさいものをヒントにしたわね」

忌々しそうに呟いた。

「そういえばノータはどうした？」

グラムは、話の話題を変えようと半ば必死に尋ねた。

「ここにいるけど？」

サリドは後ろを指差す。するとそこにはサリドの肩くらいの身長の少女が恥ずかしそうに立っていた。服はノータが着るものだが、それが原因なのだろうか。

「……名前は？」

リーフガットは笑いながら、丁寧に、最大限の優しさ（自称）で尋ねた。

「……フランシスカ」

「フランシスカ＝リガンテ＝ヨシノ」

彼女は泣きそうな声ながらもはっきりと、自分自身の名前を言った。

15

そのころ。

ヴァリヤーは瓦礫の街を逃げていた。

最初は走っていたのだが、軍人とはいえ体は老人。体力も尽きて、ゆっくりと歩いていた。

「こんなことになるはずは……」

ヴァリヤーは息も絶え絶えながら、呟いた。

そんなときだった。

「逃げるのか？」

ふと、背中から声が聞こえた。

「……貴様、なぜここに」

「逃げるのか？」

それはヴァリヤーの言葉に聞く耳をもたず、ただ繰り返した。

ヴァリヤーは声の発生源があるとみられる後ろに振り向くことができなかった。しなかったのではない。できなかった、のだ。

「……フィレイオか……。何のようだ？」

ヴァリヤーが振り向かない理由。

それは、熱。

背中から伝わってくる、熱でヴァリヤーはまるでサウナに入ってるような感覚に襲われる。

「……私をどうするつもりだ？」

何度も尋ねるヴァリヤーにフィレイオは答える。

とても、静かな口調で。

「なに、簡単なことですよ」

刹那、轟！！　と空気を吸い込み、炎の渦が形成された。

無論、振り向かないヴァリヤーにはそれを解ることはできない。

「まさか……委員会が裏切ったとでも言うのか？！　ヒュロルフタ
ーム・プロジェクトの創始者である私を？！」

「あぁ、そうそう。忘れていました」

フィレイオは歌うように言葉を紡ぐ。

「ライジャックさんから一言、伝言です。『ご苦労さま☆』ってね」

そして、

炎の渦がヴァリヤーを包み込んだ。

そのころ。

会議室のような部屋で大きな丸テーブルを境として何人かが座っていた。

全員分埋まっているように見えた座席は不自然にひとつだけ空いていた。

「ヴァリヤーがやられたらしいな」

一番右端にいた男が言う。

「……やつは結構横暴でせっかちだったからな。仕方はないだろう」

別のところにいた別の人間が答える。

「しかし、ヒュロルフタームプロジェクトに関わっていた人間を殺すとはだいぶ惜しい事をしたがね」

「なぁに、仕方あるまい」

「計画の方が先だ」

ひとまず、サリドたちはこの事を報告すべく、国王や関係各位に連絡をつけた。

そしてヴァリヤー・リオールを全世界に手配することに決定した。

……もういない人間であるというのに。

ただ、そのことはサリドたちにはまったく解らないことであった。

ところは変わり。

「……まったく、一番“殺し”でめんどくさいのは“死体の処理”だよねー」

フィレイオがずるずると何かを引っ張っている。

それは“見ようによっては”人に見える、なにか。

「さーってと」

フィレイオは思いきり力を入れて、既に掘ってあったであろう穴にそれを放り投げた。

フィレイオはその穴に適当に土を放り捨て、どこか当てもなく歩いていた。

「……まったく最近は組織の人も人使いが荒いよ。僕ら『オリジン』をなんだと思ってるんだか」

「えぇと？　次は何処だったっけ？」

フィレイオはポケットに入れてあった紙を開く。

「ふうん。南、か。まったく。次こそは面白い戦いになってほしいもんだよ……。ありゃ？」

フィレイオがポケットを探ると、封筒があった。

「こんなのあったっかな？」

フィレイオは口笛を吹きながら、ほんとうに楽しそうな感じで、封筒を開いた。

その中に入っていたのは――写真。

「なに。次の指令はこいつら焼けばいいの？　……久々に面白くなりそうだねぇ」

フィレイオは写真を見て恭しく笑っていた。

その写真は――サリドとグラムの写真だった。

16

そして、混乱も収まり、休暇も終わりを告げた。

「あー。なんだか、長いようで短い休みだったなー」と欠伸をしながらグラム。

「だって一週間のうち2日は戦闘。3日は清掃。残りの2日もリーフガットさんの始末書を書くのを手伝ってたからねぇ。休みなんてないようなもんだったよ」となんかの雑誌を見ながらサリド。

「というか、サリド。おまえ、何読んでるんだ？」

「あぁ。ヒュロルフタームのミリタリー雑誌。オリハルコンとか人工プラチナとかの新素材を特集してるみたいだから一冊買ってみた」

「へぇ。それいくらなんだよ……　3万ムル？！　なんでこんな100ページもない雑誌がこんな高いんだーっ！！」

グラムの怨念にも似た叫びを聞いて、サリド。

「ああ。なんだかね、これが付いているみたいだから」

そう言ってグラムに手渡したのは……サイコロほどの大きさの小さな立方体。

「……なんだこりゃ？」

「なんでも『クロムプラチナ』って言うらしいよ。硬度で最高を誇るプラチナと柔軟性に長けた炭素を組み合わせたとか。ヒュロルフタームの関節とかに使われてるんだと」

「……こんなもん販売しないと思うがな」

グラムは胡散臭そうにそれを眺めていた。

サリドたち二人がいた部屋に、リーフガットがノックもせずに入ってきたのは、それからしばらくしてだった。

ティータイムを優雅に迎えていた二人にとってはこれ以上の邪魔はないだろう。

しかし彼女は二人にとっては上官。命令は絶対服従なのだ。

「リーフガットさん……？　どうしましたか？」

サリドがまず声をかける。

「どうしたもこうしたもない。また戦争が始まるからあんたらを回収しにきたのよ」

「へぇ。つぎはどこなんですか？　個人的にはリフディラだけはちょっと……」

「どうして？」

「ほら。ちょっとリフディラって気候はいいから過ごしやすいんですけど、レジスタンスが活発に活動してるじゃないですか。これまで以上に泥沼な戦いはあまり……」

「そうかー。リフディラがいやなのかー」

リーフガットはわざとらしい口調で言った。

「残念だ。ホントに残念だ。リフディラは南半球だから夏だぞ？楽しいバカンスになるかもなぁ」

――その後その二人が快諾したのは言うまでもない。

行間　？

透明病、というのを知っているだろうか。

初めは風邪に似た症状を起こし、その後末端から体が透明になっていく。

――そして、やがては完全に肉体が消失してしまうのだ。

原因は解っておらず、今も一千万人の人が苦しんでいるという。

対処法と言えばただひとつ。毒を吸い取ることに限る。

ただし毒を吸い取る、と言っても、機械を用いるのではない。

かつて、吸収と排出を自由に操る能力の人間がいた。それも遠い昔の為、伝承に過ぎないのだが。

その人間の子孫――正確にはそうといわれている人間は排出こそ出来ないがどんな物質でも吸収することができる。

ただし、その物質の保管は、能力者の体内、だ。

例外は、ない。

その能力者は『シスター』と呼ばれ、自分たちのことを『シスター部隊』と呼んでいる。

一度透明病に蝕まれた体は例え毒を抜ききっても正常な肉体となる

とはいえない。

即ち、そういうことなのだ。

さて。

あの二人はどう立ち向かう？

1

バカンスといえば。

海である。水着である。

しかし、こうも考えられないか？

「リフディラって南半球かー。しかも12月ってことはミニスカサンタが拝めるのか？」

「まじかっ。それはなんとも素晴らしいぜっ」

トラックの中、サリド＝マイクロツェフとグラム＝リオールの二人はそんな話をしていた。

彼らは今、トラックの中であって、トラックの中でない空間にいる。

それはつまり。

「しかしまぁ、こんな飛行機でトラックを何台も運ぶなんてなぁ。今回ばかりは金のかかってることだ」

「グラム、相変わらず情報収集をしない人間だね？　今、リフディラになにが蔓延ってるか知ってる？」

「反乱軍だろう。それくらい解ってる」

「そうだ。反乱軍だ。しかし、そいつらが何をしているか、それは

解ってる？」

「……」

グラムは黙ったまま答えない。

「……ヒュロルフタームは、様々な金属から構成されている。また、それは、何れか一種類の金属が欠けたとき、ヒュロルフタームは完成しないことを意味している」

「なにを煙にまいたような発言していんだ。さっさと言ってくれ」

グラムは半ば苛つきながら、言った。

「だからな……僕らが今から行くのはヒュロルフタームの材料となる金属の鉱山に行くんだよ？　あれをあのままにしちゃ、反乱軍の収入源とになってしまうからね」

「なるほどな。即ち俺らはそれを反乱軍から取り上げるために向かう、と言うことだな」

「取り上げる、よりかは取り返す、に近いかもね。今行くとこはリフディラ独立以前はうちの領土だったらしいし」

サリドは端末を指で弄りながら言う。

「……というか、暑くなってきたな……。これが今のリフディラか……」

グラムが腕を捲りながら言う。

「じゃ、涼みに行けば？　今なら飛行機の冷凍室が開いてるよ。ただし氷点下７０度だけど」

「……サリド。つまりそれは俺を凍死させる、という意味か？」

2

リフディラ民主主義共和国。

15年前、レイザリーから独立した新興国である。

レイザリーの国土の半分にも満たない小さい国であるものの、資本主義国としてヒュロルフタームも保有している立派な国家である。

しかしながら、現在、社会主義を追求する反乱軍からの攻撃を受け、政治は不安定である。言うならばやじろべえのようなものか。

「そのやじろべえが完全に崩れるのを防ぐのが今回の我々の仕事だ」

ブリーフィングで、まるで大学の講堂のような広い部屋で、マイクを持って話すのはリーフガット・エンパイアーだった。

「まず鉱山にクーチェをセットする。相手はこの前のような巨大生物兵器を保持している可能性が高いとみている。みんな、心してかかるよーに」

挨拶とも叫びともとれる声を兵士たちは発して、一礼し、どんどん去っていく。

「おいおい。いくらなんでも早すぎやしないか？」

「何言ってるんだ。グラム。侵攻は深夜だよ。みんなは今から床につくの」

「……寝るのかよ！！　というかこの雰囲気の中寝るとかある意味猛者だな！！」

「何言ってるんだ？　一番先に眠る君が言うセリフじゃないだろ？」

グラムの驚きとは裏腹にサリドは少し馬鹿にするように笑っていた。

そして、辺りが宵闇に包まれた頃。

「……眠い。サリド、コーヒーくれ」

「そんなものないよ」

「それじゃ、お前が今手に持ってるいかにも暖かそうな湯気を出したカップに入った黒い液体はなんだ？」

「これはリーフガットさんの。さっき、持ってこいって命令されたんだ」

サリドは退屈そうに言った。

「……！！　サリドいつの間にそんな関係を作り出してたんだ？！」

「すごく意味が違う風にも捉えられるからやめてくれないかな」

大きな欠伸をしながら、サリドは言った。

3

少しして、リーフガット・エンパイアー率いる部隊はブリーフィングどおりの配置となった。

と、言っても何をするかは単純明解。

鉱山を壊さないようにクーチェを出し、反乱軍を殲滅する。それだけのこと。

「あれだな。いくらなんでも今度こそは暇だよな。だってまわりにいっぱい仲間がいるんだぜ」

とグラム。

「そうだな。俺だってもともとはヒュロルフタームの設計士を目指す為にきた学生だぜ？　なんで誰もやらないようなことをやるようになったんだろうなぁ？」

とサリド。

彼らは今いったいどこにいるのか、と言えば。

「……にしても暑いなー。なんでこんな暑いところにいなきゃいけないんだ？」

「命令だから仕方ないだろ。ともかく俺らはここで待機して仲間を待つんだよ」

サリドとグラムはまるでテンプレート通りの南国にいた。
ヤシの木に、青い海、白い砂浜。
そしてそこに不釣りあいな白いコンクリートの建物と迷彩服を着てアサルトライフルを持った男が二人。
「……あぁ。泳ぎたい」
「暑いもんな。泳ぎたい気持ちは俺にだってわかるさ」
「それを言いたいのは私なのだがなぁ」
サリドとグラムの会話に横入りしてきたのは彼らの上司、リーフガットだった。
彼女は今、普通の青い軍服にを着ているが、やはり彼女も暑いのか、持っていた書類を団扇代わりにして扇いでいた。
「ああ、暑い。ほんとうに暑い」
うざったそうな口調で彼女は言った。
「でも一番暑いのは姫様でしょうね」
「そう思うでしょう？　でも実はヒュロルフタームのコックピットは熱が隠らないようにしてあるし、温度を自動調節しているのよ。ノータがかく汗がノータ自身の不安要素になるらしいからね」

「なるほど。たしかに部隊の要であるヒュロルフタームのノータには最大限の配慮が必要ですしね」

「とりあえずさっさと終わらせるぞ……。今回は反乱軍殲滅と同時に暫定自治の部隊引き継ぎもあるから１０日程滞在せねばならないんだ」

「リーフガットさん。初耳ですよ、それ」

サリドがため息を、ただしリーフガットやグラムには聞こえないほど小さなものだが、つきながら言った。

4

さて。リーフガットとサリドとグラムが会話をしているとき、問題の戦場はどうなっていたかといえば。

「……そんな馬鹿な」

拡声器から、声が響く。ヒュロルフターム・クーチェに乗るノータによるものだ。

彼女は今、部隊の大半とともに反乱軍が支配する鉱山にやってきた。そこまで無傷でいけたことがまず奇跡だが、よくよく思うと本拠地にも人がいないのでは話にならなかった。

「……いったい、どういうこと？」

と、姫様は少し咳き込みながら言った。その際兵士の一人が心配して声をかけたが、姫様は「大丈夫」とだけ言って、その場から撤退した。

結論から言おう。

基地に戻ってすぐ、姫様が倒れた。

熱をはかると普通の風邪程度ではあるものの、十分に休息をとらせることとなった。

「……疲労かしらねぇ。ここ数ヶ月忙しかったし」

リーフガットは、一応予防の為にマスクを着用しているが、姫様の額に冷たいタオルをのせながら、言った。

氷水を持って廊下を歩くのはサリド＝マイクロッェフだった。

「絶対この氷水多いよな……。普通なら水枕にしてくれよ……」

と愚痴を溢しているが、先程それは修理工のばあさんにも言ったらナットが飛んできたのでリーフガットの前で言うのはあまり好ましくない。

さて、グラム＝リオールは何をしているかと言えば。

……全員の服の洗濯である。

「……ったく、なんで俺ばっかりこんな不幸な仕事ばっかり押し付けられなきゃいけないんだ？」

グラムはそう言いながらも手際よく１０台以上ある巨大洗濯機のスイッチを押した。

こういうところの機材というのは音があまり出ない、静かなものとなっている。理由は単純明解で、その音によって、敵に居場所を知

られてしまうのを防ぐためだ。

「あー、暇だな……」

と言ってグラムは近くにあった雑誌に手を取る。

それはサリドが朝読んでいた雑誌でグラムも横目で観ていたのだが、まあ、暇潰しにはどうってことはない。

その雑誌はミリタリー雑誌――ではなく、世界の様々なニュースを取り扱った雑誌だ。ニュースペーパーの廉価版とでも言うべきだろうか。

グラムは適当に飛ばし飛ばしで読んでいた。

その雑誌に書かれているのは嘘であり真である。もともとは小さなニュースだったのが記事によって誇大化される――というのもよくあるケースだ。

だがしかし。

グラムはひとつの記事に目を向けた。

それは透明病についての危険を喚起したものだった。

そこに書かれていたのは透明病が初め風邪のような症状で、後に高熱を伴うことが書かれていた。

「あれ……？　これってまさか……？」

グラムは一つの可能性を提示した。

そう。透明病というのは、

今の姫様が患っている症状そのものだったからだ。

5

リーフガットは医者を呼んでいた。医者といっても部隊に備え付けの軍医だが。

「ふむ……」

医者は聴診器をあて、怪訝な表情を示した。

「どうですか？」

リーフガットが心配そうな目で見詰めていた。

「芳しくありませんね。薬を投与しても治らないならば風邪ではないのかも……」

「風邪でなければ……」

「透明病」

医者はしばらくして、呟くように言った。

「……透明病、ですか？」

「聞いたことがないようですな。たしかにレイザリーでは縁も所縁もない病名でありましょうからな」

「その……透明病、とはなんですか？」

リーフガットが医者に丁寧に尋ねる。

「簡単だ。早い話が消えてなくなってしまうのだよ」

医者は何の躊躇もなく話した。

「消えて……なくなる」

「あぁ。そうだ。この症状の進み方から行けば……1ヶ月くらいでそうなってしまうんじゃないのかね」

「助ける方法はないのか。あなたは医者なのだろう？」

「と言われてもねぇ。僕は神でもないから。確かに僕は何千人もの人を救ってきた。だから『生と死の番人』とも喚ばれるが、さすがに今回ばかりは……いや、」

話が不意に途切れた事に思わずリーフガットは目を合わせる。

「そういえば、まだいましたね。透明病の毒を吸い取り、ある程度の条件つきだが、治してくれるところが」

「どこですか？！」

そして、医者は呟く。

「……シスター部隊」

と。

「シスター部隊……」

「えぇ。そこならば姫様を助けられる筈です」

医者はすっかり髪のなくなった頭を撫でながら言った。

「……まて。ならばシスター部隊はどこにいる？」

「今は全国を回っている筈ですからリフディラの何処かにいるかと」

「阿呆。リフディラと言っても単純計算でレイザリーの半分はあるんだからね……。そこを虱潰しに探すといっても１ヶ月で済むかどうか」

「大丈夫です。大体場所は把握しています」

医者はまるで直射日光の太陽のように爽やかに笑う。

そして、医者は静かな口調で言った。

「ここから北へ６０ｋｍ離れた首都ウェイロック……。そこにシスター部隊は駐留しています」

6

「なるほど。……しかし軍医」

「なんでございましょう？」

「なぜそれを知っている？」

「私とて昔はシスター部隊に関わりのある医者だったのですよ。その際仲のいいシスターから聞かされましてね」

なるほど、とリーフガットは呟いた。

「にしても……。誰に姫様の警備を頼むか……」

とリーフガットが虚空に目をやった。

そのときだった。

ドアのノックが部屋に響いた。

そして。

「どうやら来たみたいですね」

笑って、言った。

「失礼します。氷水持ってきました」

一人目はサリド＝マイクロツェフ。さっき彼が言った通り、氷水をここに持ってきたのだ。

「失礼します。ちょっと用があって」

丁寧な口調になれていないのか、少しイントネーションがおかしい二人目はグラム＝リオールだった。

「サリド。グラム。ここで待て。すこし話すことがある」

リーフガットの平坦な口調に思わずサリドとグラムは肩を震わせた。

「……なんですか」

サリドがようやく口を開いてリーフガットに尋ねる。

「……まさかまたあの生物兵器を俺らだけで片づけろとか言うんじゃないですよね？」

グラムがサリドの発言に付け足したように言った。

「違う違う。もっと重要な任務よ」

「？」

「リフディラの首都ウェイロックに行って、姫様の診断が出来るシスター部隊を探しに行くのよ。出来るだろう？」

7

「首都へ……！　姫様に何が？　ただの風邪じゃないんですか？」

「まあ、ただの風邪ではないことは言っておこう」

サリドの問いにやんわりとリーフガットは答える。

「……透明病、じゃないですか」

「……グラム。お前それを何故」

「……サリドが持ってたミリタリー雑誌に書いてあっただけです」

グラムの話を聞いてリーフガットは思考する。

「とりあえず」

口を開いたのはリーフガットではなくサリドだった。

「姫様を助けるために医者が必要なんですよね？」

「あ、あぁ。そういうことだ」

「行きます」

サリドはあっという間に即決した。

「サリドおまえ……。少し考えるとかしねーのかよ！　普通なら態々敵のスパイがいるであろう国を回ろうなんて思わねーよ！！」

「じゃあグラムはほっとくんだね？　姫様を」

サリドの問いにグラムは言葉を失った。

答えられる言葉が、彼には浮かばなかった。

そして浮かんだ彼なりの言葉は至極ベクトルを変えたものになった。

「……それって好き嫌いの感情抜きなのか？」

「うつらないとは限らない。危険と隣り合わせよ。透明病になるのは確実。それでも？」

「リーフガットさん。任務を断る理由なんて僕らにはないですよ」

サリドは笑って答える。

8

ということで。

サリドとグラム、そして姫様を対象とした臨時のブリーフィングが開かれた。

姫様は他の人間のことも考慮して閉鎖空間にひとりぼっちでテレビ電話というシステムで行われることとなった。

それを見てサリドは少し悲しくなったが、そんな気休めばかりの言葉をかけても意味はないと、思った。

「とりあえず首都ウェイロック迄の計画を言うわね」

リーフガットが目の前の机に大きく地図を広げた。

「ウェイロックはここから西方７０ｋｍ。そう遠くはないわ。軍用車を貸すからたぶん三日とかからずに着く筈よ」

「問題はそれから、ですね」

サリドの言葉にリーフガットはしおらしげにうなずく。

「シスター部隊は何処かの宿屋に停留しているらしいわ。白地に赤の十字架の旗がかけられているはずだから、それを目印に」

「それじゃあ、オーケー？」

リーフガットの言葉に三人ははっきりと頷いた。

「それじゃあ、行こうか」

次の日、サリドとグラムは軍用車に乗り込んでいた。

後ろの座席は取り外されてベッドが置かれている。そこに寝かされているのは姫様だ。今日は調子がいいのか上半身を上げ、ぼんやりと外を眺めていた。

「大丈夫かい？　姫様」

助手席に座っていたサリドが後ろを向いて言う。一応いってはおくが運転するのはグラムだ。

「……大丈夫。今日は気分がいい」

「無茶しちゃ駄目だよ。寝れるときに寝ておいてね」

「……分かった」

サリドは微笑みながら、後ろのとびらを閉めた。

「サリド、ほんとにこの道であってるんだよな？」

グラムはサリドが姫様と会話を終えるのを見計らって言った。

「ん？　合ってると思うけど……？　ちょっと待って。地図見てみ

る」

そう言ってサリドは助手席の前にある収納スペースから少し埃がついている古い軍用の地図を取り出した。

「えーと……今はＬＳ７６だね。このまま行けばウェイロック首都自治区に入るからあとは道なりに行けば」

「りょーかいっ」

そう言ってグラムはアクセルを踏み込んだ。

「にしても、辺鄙な土地だよなぁ。誰も彼もやる気がないみたいだ」

「みた感じ雨があまり降らない土地みたいだし農業を諦めてるんじゃないかな？　土地も随分栄養がなくて痩せ細ってるしね」

サリドはまたも雑誌を読みながら言った。

「サリド。お前はほんとに雑誌を読むのが好きだな……。ってか今は何の本なんだ？」

「ん？　えーと確か……『ラミアーの電気学が丸ごとわかるガイドブック』だけど」

「なんじゃそりゃ」

9

２時間後。

日が傾いてきたころにようやく三人を載せたトラックは首都ウェイロックに到着した。

ウェイロックはもともと城塞が建築され、それを中心として広がった、言わば城下町である。

堅牢な建物の間を、蜘蛛の糸のように張り巡らされている石畳の道路を軍用のトラックが走っているのだ。

一応、レイザリーとリフディラは同盟関係にあるためこういうことはしても構わないのだが、やはりなんだかそういうのは緊張してしまうものなのである。

「何処だろうな。宿屋は……」

トラックに乗りながら、サリドとグラムは慎重にリーフガットから言われたマークの旗が掲げられた宿屋を探す。

「彼処じゃない？　ほら『グラン・モーレ』って書いてあるとこ」

サリドが唐突に言ったので、グラムもその方を見た。

すると確かにその通り、白地に赤の十字架のマーク……シスター部隊のマークの旗が掲げられていた。

「彼処か」

そう呟いてグラムは宿屋グラン・モーレの傍に車を停めた。

「失礼する」

グラムはグランモーレの扉を開けた。

中は質素ながらも埃一つない綺麗さだった。なるほど、シスター部隊が駐留する宿屋らしいかもしれない。

カウンタに座る無精髭を顎に生やした男にサリドは話しかけた。

「ちょっと聞きたいんだけど」

「ん？」新聞を読んでいた男はサリドの言葉に怪訝な表情を見せて言った。

「ここにシスター部隊がいると聞いたんだが」

その言葉を言った瞬間、男の眉がぴくりと痙攣したかのように動いた。

「……あんたら余所者だろ？　しかも服装からしてレイザリーだな？」

サリドは頷く。

「だめだ。諦めな。シスター部隊は今は結構忙しいらしいからな」

そう言ってまた男は新聞を読み始めた。

「どうしたんですか？」

サリドたちが諦めて帰ろうとしたそのとき、奥の方から声が響いた。

それはとても透き通った声で、声を聞いた者を優しく包み込むような……そんな声だった。

「シスター・ビアスタ。何故この時間にここへ？」

宿屋の店主は先程とはうってかわって、緩めた口角をこれでもかというほど高くあげ、優しい声で言った。先程の峻厳そうな近寄りがたい雰囲気を放っていた店主は何処へやら。

そしてシスター・ビアスタと呼ばれた方は白いローブを着ていた。頭に被る帽子の部分は今は後ろの方に置いてあり鮮やかな黄色の髪を見せている。彼女はまるで羽と輪っかさえあれば天使のようにも見えてしまう存在だった。

「薬草を調合していたのですよ。ところで……そちらは？」

シスター・ビアスタが困惑の表情を示しその視線をサリドに送った。

「あぁ。こちらは……」

今度は店主が困惑の表情を示した。

サリドはここぞとばかりにまくし立てるように言った。

「透明病の患者がいます」

空気が凍りついた。

誰も何も言わない状況。

「……おや。それは不味いですね？」

シスター・ビアスタは先程の困惑の表情のまま首を傾げた。しかし、その眼は獲物を狙う蛇のように鈍く光っていた。

「とりあえず二階に運んで下さい。店主。奥の昇降機を借ります」

そう言ってシスター・ビアスタは素早く階段を登った。三人の返答を得ないまま。

10

とりあえず、シスター・ビアスタの言う通りにすることとした。
車に寝かせていた彼女を下ろし、二人がかりで奥にある昇降機に持っていった。

この世界で昇降機は珍しくない。油圧式の昇降機は現在、殆どの国の主要都市に使われているからだ。まあ普通に考えれば何十メートル級の人型戦闘兵器があるのだからそれくらいの技術があってもおかしくはないだろう。

「にしても、こんな一宿屋にねぇ。儲けてるんだなぁ」

グラムが呟くとグランモーレの店主は恭しく笑った。

驚くべきことに、この宿屋グランモーレはシスター部隊の貸し切りだという。五階建てらしいのだが、その五階までがシスター部隊の場所として埋まっているのだという。

そして……ここは三階。ベッドが大量に置かれていて簡易の診療所となっていた。

シスター・ビアスタは三階に着いてから席を外すので少し待つように命じ、昇降機を用いて上に向かっていった。

……三人は残された部屋でただ俯いていた。

「……大丈夫なのかな」

サリドが唐突に呟いた。

「え？」

「たしか透明病って永遠に治らないものなんだろ？　このまま治らないで死んじまったら……」

「ばかやろう」

グラムから今まで押さえ込んでいた苛立ちが零れた。

彼はたぶん何を考えていたのかわからなかっただろう。彼は言葉より先に体が動いていた。

サリドの右頬に衝撃が走り、サリドは少し後ずさった。

「な、なにするんだっ」

サリドが叩かれた右頬を抑えながら、言った。

「……サリド。おまえ、何言ってんだ？　姫様も、勿論俺も、あのシスターさんだって諦めちゃいねぇのにお前だけ諦める、ってのか？　そんなの理不尽だろ？！　負けずに必死に頑張ってる姫様は諦めてねぇんだ！！　お前はそれが解ってんのか？！」

グラムは早口でまくし立て、さらに、

「サリド。俺達が諦めちゃだめなんだよ。最後の綱なんだよ。だからお前も諦めるな。俺も諦めないから。な？」

グラムの言葉にサリドは最初は何も反応出来なかったが、その後に頷いた。

「……あのー、少年漫画のような熱血喧嘩展開は外でやって頂けると助かるんですが……」

不意に声がしてグラムとサリドはその声がした方を向くと、

どうしたらいいのか解らずに慌てている、何か大量の物をもったシスター・ビアスタの姿があった。

11

「ははぁ、それでですか。確かにこういうのは初めはとっても心配しますものね」

「申し訳ない」

グラムは何故か顔を紅潮させて、謝っていた。

風邪でもひいたのか、とサリドは聞こうとしたが野暮だったので止めておいた。

「……とりあえずありったけの治療薬を探してきました。といっても」

シスター・ビアスタは俯きながら姫様の方を見て、言った。

「私だけでは完治させるのは難しいでしょう。だから、ひとつ。あなたたちに頼みがあります」

「頼み？」

「はい。あなたたちはこれから北のヌージャヤックという場所に行ってシスター部隊のリーダー、『エンゼルハンド』に会ってここに連れてきて下さい」

12

そのころ。リーフガットたちがいる基地では掃除諸々を行っていた。なんとなく兵士の覇気がないようにみえるのは敵のアジトまでようやく辿り着いたら実はもぬけの殻だった、ということが響いているからだろう。

「ほら、シャキッとするー。でないと暫定休暇の日数が減るよー」

パイプ椅子に腰かけて書類の束を団扇代わりに使っているのはリーフガット・エンパイアーだ。彼女もまた、今回の作戦のあまりにも呆気ない結果に少なからず落胆していた。

リーフガットは自分の部屋の書類の整頓を行っていた。といってもそこまでではなく、例えば書類の束で机や床その他諸々が覆われているとか、精々軽い掃除くらいだった。

斯くして今はテレビを見ながらアフタヌーンティーを飲んで一段落ついているところであった。

「夏とはいえこの辺は寒いな……」

そう呟きながらリーフガットはアフタヌーンティーを一口、口に含む。

テレビではちょうど祭りのシーズンからかその宣伝しかやっていなかった。といっても今は、仮にそれを見ているのが資本四国の人間としても、うざったく感じることだろう。

何故ならば今はレイザリーの首都にて行われている慰霊祭の放送をしているからだ。たぶん世界のどこを見ても故人を偲ぶ時に世界トライアスロンの宣伝なぞするとは思えない。

しかしながらレイザリー王国は資本主義国の最大権力を持つ国であり資本四国でも中心代表国を担う重要な国であり、それを仮に行っても誰も注意しない。だからレイザリーでは資本と人心倫理の欠如が見られ、それが社会問題にまで発展してしまっているのだ。

話を戻すと、『慰霊祭』とは１０年前に発生したとある事故で亡くなった人間を慰霊するためのものである。

その事故は未だ多くの謎が解明されておらず遺族と国との間で亀裂が走っている。

その事故とは、ヒュロルフタームの“暴走”。

現在使われているヒュロルフタームのナンバリングは初号機からとなってはいるが、その大本となる零号機が存在していた。

その名はズリ。

ヒュロルフターム・プロジェクトが母体となって試作品エヴァードを作り上げ、それを基にしてズリが誕生した。その後次いでクーチェが完成するのだが……。

その間に起きた事故である。先程にも言った通りに多くの謎が解明されておらず、また、それを原因として反ヒュロルフターム派が生まれたことも事実であった。

「そうか……。もうあれから１０年か……。時代も変わったものだな」

リーフガットはそう言って、またアフタヌーンティーを口に含んだ。

13

サリドとグラムはグランモーレの一階にある小綺麗なカフェテリアにいた。

カフェテリアは宿屋グランモーレの下請けで経営しているらしく、シスターが作戦会議をするなら、とそこを教えてもらったのだった。

「さて……ヌージャヤックか。大分距離があるな」

グラムはインスタントのコーヒーを旨そうに啜った。

「そこに行くには街道を使えば行けるかな。2日もすればいけれると思う」

サリドは携帯端末の画面に出てくる色々な情報を指で滑らせていった。

「……これは結構厳しいな……。姫様の症状が何時まで持つか、あのシスターも解らないって言ってたし……。簡単に済めばいいんだけどな」

グラムは先程頼んだフィッシュ&チップスを一欠片手に取り、それをサワークリームのソースにつけて口に放り込んだ。味は先ず先ずだが腹に入ればどうってことないし第一あの戦場で味わった軍用レーション消しゴム風味に比べればこの料理は世界三大珍味に等しいものを二人は感じていたのであった。

「……それじゃあ向かうか」

グラムは皿を適当に一ヶ所に集め、席を外した。

サリドも頷いて席を立った。

二人はここまで来るのに乗ったトラックに乗ることにしておいた。シスター・ビアスタが最新鋭の乗用車を用意してくれたものの、二人は今まで乗っていた車の方がいい、とそれを丁重に断った。

二人は今長い長い砂漠の上を走っている。太陽がまるでオーブンのように熱線を容赦なく二人に押し当てていた。

「畜生……。こりゃ熱いな……。まさかこんな砂漠があるなんて」グラムは悔しがったのかアクセルを強く踏み込み、車のエンジンが轟音を上げた。

「まぁそう言わずに。これ使う？」

サリドは涼しそうな笑顔でグラムに何かを渡した。

それは、透明な薄い膜だった。正確に言えばその膜はさわると少し冷たくて、柔らかかった。例えるならば、ゼリーのような感触で。

「さっきシスターにもらったんだ。熱中症予防のフィルムで、所謂メンソール系の薬効成分を寒天に溶かし込ませたものなんだって。軍用のサプリメントと言って訳の解らない工業製品使うよりこっちの方がいいから、と。ま、よく言うオーガニックってやつ？」

「……それは意味が少し違わないか？」

グラムはそう言いながらサリドから貰った膜を額に付けた。

14

その頃。

リーフガットは漸く片付け等から解放され、久々の睡眠を取っていた。

もはや戦いはないだろうという判断の上でのことだが、警備のため数名の人間は起こしてはいるものの。

夜も更け、生きとし生ける物全てが寝静まった頃のことだった。

虚空に乾いた銃声が響いた。

リーフガットはそれに気づき急いで立ち上がり、外に出た。

廊下を駆け足で歩くと、慌てた顔で部下と思しき軍人が出てきた。

「上官！　お目覚めですか！」

「御託はいい！！　いったいどうしたんだ？！」

「西南の方角から発砲！　ライフルと思われます！　数はおよそ１０～２０！」

その軍人は端的に敵の情報を告げる。

「ここにいる全員を叩き起こせ！　ライフル班と光学兵器班を攻撃に回せ！」

リーフガットの命令に、軍人は即座に敬礼をした。
リーフガットはその軍人に命令をしてから自分の部屋には戻らずその廊下の突き当たりにある部屋へと向かった。
扉を開けるとすでに命令がされていたかのように、机にここ周辺の地図が置かれていたり必要となるレーダー等が駆動していた。
「ご苦労。ライズウェルト・ホークキャノン準尉」
リーフガットは部屋に入るや否や直ぐに傍の計器を見つめている女性に謝罪の意を表する。
「別に問題ないですよ。リーフガットさん」
「……私を本名で呼ぶのは家族以外にあの問題児どもとあんただけだ」
リーフガットはため息をついて忌々しげに呟く。
しかし、当の本人、ライズウェルトは曇りない笑顔で、
「あんた何してんの？　指揮官なんだから指揮しなさいよ」
「あ、あぁ……」
こういうのが昔から嫌いだったが、今の関係を維持出来ているのはリーフガットの堅実かつ峻厳な性格とライズウェルトの温厚な性格に衝突がなかったことも言えるのだろう。彼女が果たして温厚と呼

べるのか、そうには思えないが一番そう形容すべきとリーフガットが判断を降したためであったりするのだが。

「……状況は？」

「芳しくないね。西南に17の生体反応。その何れもがグラディア軍の通信機のチャンネルに設定してある」

「……軍の、リフディラ軍の、クーデター？」

「そうは考えられない。第一、もしクーデターならばもっとたくさんの人員と武器がきてるはず。なのに彼らは少数で行動してるし武器はライフル一択みたいだし。たぶんレジスタンスによるものが正しいかな」

「やっとお出ましってわけね」

リーフガットは、怪しげに笑った。

「さぁ……。レジスタンスとやらの実力、見せてもらおうじゃないの」

リーフガットは笑みを崩さずに管制レーダーを見て呟いた。

それを見たライズウェルトはほくそ笑んで、レーダーに視線を注ぎ、

「久しぶりに見たわね。あなたのそんな熱い顔」

リーフガットにぽつりと、聞こえるか聞こえないか微妙なくらい小さな声で呟いた。

15

リーフガット・エンパイアーとライズウェルト・ホークキャノンは幼馴染みかつ親友かつ良きライバルであった。

四年前の世界トライアスロンにリーフガットが参加した時もライズウェルトが本人の希望によって健康管理士に任命されたほどだった。

リーフガットとライズウェルトが出会ったのは6歳のこと。代々軍人であったエンパイアー家と代々医者であったホークキャノン家が出会ったのは多少なりとも無理があったがそれでもこの友好関係が在るのはお互いの父親が良き友人で理解者であった、ということだろうか。

リーフガットの父が、彼女が11歳のときにカムスチャル王国で死んだという時もライズウェルトの父は彼女と同じように悲しんだ。

その後はホークキャノン家の援助を受けつつリーフガットは生きていった。彼女の父は何かあったら、とホークキャノン家に援助の約束を取り付けていたのだった。

そしてリーフガットは父親の後を追って軍人となり、ライズウェルトはもとから学んでいた通信関係の仕事を生かし彼女もまた軍人となった。

そしてまるで大きな外の意志が働いていたかのようにリーフガットとライズウェルトは同じ部隊に置かれることとなった。

リーフガットは父親の功績や彼女自身の功績も含めて所謂エリート

であったので官位をぐんぐんと上げていった。

それに対しライズウェルトはもともと仕事は好きなようだが昇進に関してはそこまで興味を持っていないらしく、軍に入った当時の準尉という位を保ち続けているのだった。

16

「ちょっと、ライズ、聞いてる？」

リーフガットの声に、ライズウェルトははっと我に返った。

「どうした？　眠いなら他の人間に頼むが……」

「いや、大丈夫。心配させてごめんなさい」

そう言ってライズウェルトは気を取り直し、再びレーダーを見据えた。

そして、そのときだった。

レーダーに突如ノイズが走り、その正確な情報を映し出さなくなったのだ。そのノイズは徐々にひどくなっていき、最終的にはそれのみを映すようになった。

それを見てリーフガットは目を疑った。

そして、

「何してるの！！　いったいなにが？！」

ライズウェルトに叩きつけるように叫んだ。

「その原因が解ったら苦労しない！」

そうライズウェルトは叫んで即座にパソコンを用いて修正を試みる。大体外からダメージを受けていないとすれば、その正体はプログラムのハッキングによるものだろう。

通信機器を取り扱っている人間は二種類の技能を学ぶ必要がある。ひとつはレーダーから読み取り、その結果を正確に反映する技能。もうひとつは外部からの攻撃に際しそれを出来るだけ最小限の被害で食い止め、あわよくば敵側に逆に攻撃を仕掛けることに関しての技能だ。

前者はアウトプットされた電磁波等の見えないデータが可視化され、それを読み取る。一方後者はインプットしたプログラムコードの、即ち見えるデータが０と１に不可視化されそれを攻撃に用いる。即ち通信士とは『見えない世界』のセクションを務める存在であるのだ。

「出たわ！！　発信源はｕｎｋｎｏｗｎ……。探知不能？！」

それを聴いたリーフガットも思わず顔を強張らせた。例えそういう道に精通していなくとも、その言葉の意味は理解出来る。

つまり“ハッキングした人間が見つからない”のだ。その人間は、もしいるとするならば、パソコンや携帯端末を経由せずにそのセクションを成し遂げたことと同じ意味を持つ。

「……たぶんそんなことはあり得ない。妨害電波を出しているに決

まってる」

ライズウェルトはまるでリーフガットの心を読んだかのように呟いた。

17

レイザリー軍の基地を見下ろせる高台に小さな建物が建っていた。

そこはかつてはリフディラ軍の軍事施設として使われ、表向きは軍人の体力増強の為の研究を行う施設であった。

しかしそれが倫理的に違反してるという『大神道会』の判断に基づき焼き払われた。

今はそこにはいつ崩れてもおかしくないような建物の残骸が建っているだけであった。

そんな建物に一人の男がやってきた。

男の名はレイデン・ミーシェルハイト。傭兵だったのか体のところどころには傷があり、中でも左目を塞ぐように縫いつけられた傷は彼の回りに誰も近付かせないような、そんな何かが感じられた。

レイデンは地下に降り、その奥に在る扉まで用心深く近づき、ある一定のリズムで扉を叩いた。

扉の中は外観とは見違えるように綺麗で、雑然としていた。部屋は狭く、二人か三人入ったらもう詰まってしまうような感じであった。

何故かといえば。

レイデンが部屋に入ると部屋の中には誰もいなかった。その代わりに部屋の半分以上を占拠する“それ”はいた。

それは旧型のコンピュータらしかった。

らしかったとはどういうことかと言えば単純に解らないのである。これがいつ作られたかも解らない、誰が？　何のために？　それすらも解らない。全てがブラックボックスに包まれた、そんなものなのだ。

名前はアリスというらしい。なぜアリスと解ったかと云えばコンピュータの外装に金属製のプレートが張り付けられており、そこに『Ａｌｉｃｅ』と書かれていたからだ。

科学者の中にはこれを旧時代の物と唱える人間もいる。

旧時代といってもそもそもそれがあるかどうかも証明されていないのだが、時代区分的には今いる世界は遥か昔に一度滅びたという。その“滅びた時代”を旧時代といい、今“復活してここにある時代”を新時代と呼ぶことにしているらしい。

今、それは目の前にある小さな画面に白で書かれた文字の羅列を長々と映し出していた。レイデンはそちらのほうは疎いのでよく解らないが仲間が言うにはこれはプログラムというものでこのコンピュータは仲間が指示した通りに動いている、とのことらしい。

昔からレイデンはそういうのに疎く、自分もまたそれを改善しようとしなかったために今の今までこれを使えずにいるままだった、というのもある。

彼の任務はこのコンピュータを守ることで仮にこれが陥落したら錯綜していた情報が元に戻りレイザリー軍は総力を挙げ攻め込んでく

るだろう。なんとしてもそれは避けたい。

つまりは命綱をこのコンピュータが握っていて、このコンピュータが何らかの影響で異変を起こしただけでもゲームオーバーなのだ。

レイデンはとりあえず部屋の中にあるガスコンロを用いてお湯を沸かした。余談ではあるがこの時期のリフディラはとても寒く、夏といった割には氷点下になることもあるのだ。

況してやここは地下。地上より寒いというのは一目瞭然である。

お湯が沸き上がり、少し薄汚れた銀のカップにお湯を注ぐ。少し猫舌なレイデンは息を吹き掛けながらそのお湯を飲み始める。

18

そんな平和な一時を破壊するかのようにけたたましいサイレンが鳴り響いたのはレイデンがカップに入ったお湯を丁度飲み終わったところですこしその余韻に浸っているところだった。

最初は何のことだったが訳が解らなかったようだったが直ぐにその状況を理解し行動を開始した。

先ず行ったことはコンピュータには絶対に触らないようにして小さな画面を確認することだった。

リーダーが機械に疎いレイデンの事を解っていたために最低限のマニュアルを作ってくれていたが為の行動だ。レイデンは基本何も信じずに基本自分の考えを信念として動いているのだがこの時に限っては例外で彼はこのマニュアルに従って行動する。それほどリーダーを信頼している証拠なのだろう。

「畜生……。いったいなにがどうなってるんだ？」

レイデンはマニュアルを見ながら目の前のキーボードを丁寧にひとつひとつ打っていく。

「……エラーコード７４４３８？　……まさかハッキングだってのか？」

レイデンはマニュアルに書かれた表と照らし合わせたのだろう。その表と画面を目が行き来し、その度にレイデンの目は丸くなっていった。

「どうやら失敗のようだね」

レイデンの背中に声がかかった。その冷たい声はまるでナイフでも突き立てられているかのような錯覚を呼ぶ程であった。

「リーダー……。なぜここに！！　……いや、違うな？」

レイデンは少し違和感を感じた。それはたぶん普通の人間なら感じ得なかっただろう僅かな違和感だったが、それを読み取れたのは彼が傭兵だからであろう。

「……流石だね。僕を見破るなんて。初めてじゃないかな」

レイデンは妙な感じを覚えた。

それは、熱。

背中からじわじわと熱が感じられる。それと考えられないほどの緊張感も合い重なって、レイデンはそこを振り返ることが出来なかった。

「君は用済みだよ。だが、その後ろのコンピュータはまだ利用価値があるから大切にしろ、との上からの命令でね？　だから退いてくんないかなぁ」

声はレイデンに答える隙を与えずにまた話を続ける。

「僕としてはここを全て燃やしたいんだよ？　でもね、仕方ないよね。彼らには逆らえないし、逆らってもメリットなんてないし」

「……それを素直に従うとでも？」

レイデンは後ろを振り向き、背中のベルトにかかったナイフを引こうとして、

ふと、息を呑んだ。

何故ならそこにいたのはレイデンの腰ほどしかない小さい子供だった。しかし目は所謂子供らしい目などではなく光の消えかけた目。腰の据わった目とも云えるそれはつまらなそうな感じにレイデンを見つめていた。

髪は炎のように真っ赤で服は仄かにオレンジ色のポロシャツ、他は……あまりよく見ることができない。しなかったのではなく、できない。

何故ならここは戦場。一瞬の油断が命取りに為り得る場所。だから、レイデンはナイフを引き抜いた。少年の姿を一瞬でも見つめた時点で油断していたことに気付かずに。

「敗けだよ」

少年はぽつりと呟いて手をレイデンの目の前に向ける。

そして、轟！！　と炎が渦を巻いてレイデンの方に恐ろしいスピードで向かってきた。

レイデンは避けようとして……それをやめた。

そしてレイデンは少年が放った炎に包まれた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6817w/

FORSE

2011年11月24日20時58分発行